豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

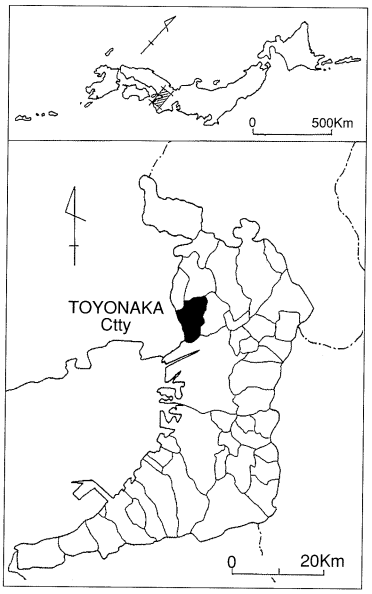
平成14年度（2002年度）

平成15年（2003年）3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成14年度(2002年度)



平成15年(2003年)3月

豊中市教育委員会

序　　文

豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県に接しています。県境を流れる猪名川から常に豊かな水がもたらされ、北方の千里丘陵にかつて広大な森林をひかえたこの地では、古くから人々の生活の場が育まれ、多くの歴史的遺産を受け継いできました。一方、商都大阪に隣接する関係などから、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきた結果、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。しかし、近年では開発の勢いが落ち着いてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書では、平成14年度に調査を実施した麻田藩陣屋跡、本町遺跡、および各遺跡における確認調査に加え、平成13年度後期に調査を実施した新免遺跡・曽根遺跡、および各遺跡における確認調査の成果の一部も合わせて掲載しました。麻田藩陣屋跡では近世の陣屋成立に先立って営まれた中世集落を確認し、本町遺跡では古墳～中世にわたる集落縁辺部の様相が明らかになるなど、各遺跡で新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成15年（2003年）3月31日

豊中市教育委員会
教育長　淺利敬一郎

例　　言

1．本書は、平成14年度国庫補助事業（総額7,500,000円、国庫50％、市費50％）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成13年度国庫補助事業として実施した新免遺跡第53～55次調査、曽根遺跡第７次調査の成果を併せて収録するものである。

2．平成13年度事業として、平成14年４月11日から平成15年３月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げる。

4．本書の作成にあたり、各章の執筆は各調査担当者が実施した。また、第Ⅷ章は各調査担当者の見解をもとに、陣内が執筆した。
　なお、全体の編集を陣内が行なった。

5．各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、略北を示す。

6．挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。

7．挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則的に１：４とする。

8．各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成13年度（平成13年11月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第53次	玉井町１丁目252・253・253－２の一部	51㎡	陣内高志	2001年11月20日～11月30日
新免遺跡	第54次	玉井町４丁目21－１	81㎡	橋田正徳	2002年１月７日～１月28日
新免遺跡	第55次	玉井町１丁目255・256	160㎡	陣内高志	2002年３月１日～３月29日
曽根遺跡	第７次	曽根西町４丁目28－１	74㎡	橋田正徳	2002年１月29日～２月28日

平成14年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
本町遺跡	第27次	本町４丁目159－１	196㎡	陣内高志	2002年５月20日～６月24日
麻田藩陣屋跡	第11次	蛍池中町３丁目32－28他	42㎡	清水　篤	2002年６月19日～７月10日

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境　（陣内）
1．地理的環境 …… 1
2．歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　麻田藩陣屋跡第11次調査　（清水）
1．調査の経緯 …… 5
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 5
（2）検出した遺構 …… 7
3．まとめ …… 8
第Ⅲ章　本町遺跡第27次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 9
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 9
（2）検出した遺構と遺物 …… 11
3．まとめ …… 14
第Ⅳ章　新免遺跡第53次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 15
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 15
（2）検出した遺構 …… 16
（3）出土遺物 …… 17
3．まとめ …… 19
第Ⅴ章　新免遺跡第54次調査　（橘田）
1．調査の経緯 …… 21
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 22
（2）検出した遺構 …… 22
3．まとめ …… 25
第Ⅵ章　新免遺跡第55次調査　（陣内）
1．調査の経緯 …… 27
2．調査の概要
（1）基本層序 …… 27
（2）検出した遺構 …… 29

（3）出土遺物 ……31
3．まとめ ……32
第Ⅶ章　曽根遺跡第７次調査　（橘田）
1．調査の経緯 ……33
2．調査の概要
（1）基本層序 ……33
（2）検出した遺構 ……34
3．まとめ ……36
第Ⅷ章　確認調査の成果 ……37

挿　図　・　表　目　次

（第Ⅰ章）
第１図　市内遺跡分布図（1：50,000）……2
第２図　調査地点と周辺の地形（1：50,000）……4
（第Ⅱ章）
第３図　調査範囲図（1：200）……5
第４図　調査地位置図（1：5,000）……5
第５図　調査区平面・断面図（1：50）……6
第６図　建物配置復元図……8
（第Ⅲ章）
第７図　調査範囲図（1：1,000）……9
第８図　調査地位置図（1：5,000）……9
第９図　調査区平面・断面図（1：100）……10
第10図　竪穴住居平面・断面図（1：50）……11
第11図　竪穴住居出土遺物（1：4）……11
第12図　井戸平面・断面図（1：40）……12
第13図　出土遺物（1：4）……13
（第Ⅳ章）
第14図　調査範囲図（1：400）……15
第15図　調査地位置図（1：5,000）……15
第16図　調査区平面・断面図（1：80）……16
第17図　溝１遺物出土状況図（1：20）……17
第18図　土坑１遺物出土状況図（1：10）……18
第19図　出土遺物（1：4）……19

（第Ⅴ章）

第20図　調査範囲図 ……21
第21図　調査地位置図（1：5,000） ……21
第22図　調査区平面・断面図（1：80） ……22
第23図　木棺墓１平面・立面図（1：20） ……23
第24図　木棺墓１出土遺物（1：3） ……23
第25図　土坑１平面・立面図（1：20） ……24

（第Ⅵ章）

第26図　調査範囲図（1：400） ……27
第27図　調査地位置図（1：5,000） ……27
第28図　調査区平面・断面図（1：100） ……28
第29図　竪穴住居平面・断面図（1：60） ……29
第30図　掘立柱建物平面・断面図（1：60） ……30
第31図　出土遺物（1：4） ……31

（第Ⅶ章）

第32図　調査範囲図（1：200） ……33
第33図　調査地位置図（1：5,000） ……33
第34図　調査区平面・断面図（1：80） ……34
第35図　建物１平面・断面図（1：40） ……35
第36図　土坑１平面・立面図（1：10） ……35
第37図　外堀断面図（1：20） ……36
第38図　外堀出土遺物（1：3） ……36

（第Ⅷ章）

第１表　確認調査一覧表 ……37
第39図　確認調査地点位置図（1：50,000） ……38
第40図　トレンチ掘削状況 ……39
第41図　トレンチ断面図 ……39
第42図　トレンチ掘削状況 ……39
第43図　トレンチ断面図 ……39
第44図　トレンチ掘削状況 ……40
第45図　トレンチ断面図 ……40
第46図　トレンチ掘削状況 ……40
第47図　トレンチ断面図 ……40
第48図　トレンチ掘削状況 ……41
第49図　トレンチ断面図 ……41
第50図　トレンチ掘削状況 ……41

第51図　トレンチ断面図 ……41
第52図　トレンチ配置図 ……42
第53図　トレンチ断面図 ……42
第54図　トレンチ掘削状況 ……42
第55図　トレンチ断面図 ……42
第56図　トレンチ掘削状況 ……43
第57図　トレンチ断面図 ……43
第58図　トレンチ掘削状況 ……43
第59図　トレンチ断面図 ……43
第60図　トレンチ掘削状況 ……44
第61図　トレンチ断面図 ……44
第62図　トレンチ掘削状況 ……44
第63図　トレンチ断面図 ……44
第64図　トレンチ掘削状況 ……45
第65図　トレンチ断面図 ……45
第66図　トレンチ掘削状況 ……45
第67図　トレンチ断面図 ……45
第68図　トレンチ掘削状況 ……46
第69図　トレンチ断面図 ……46
第70図　トレンチ掘削状況 ……46
第71図　トレンチ断面図 ……46
第72図　トレンチ掘削状況 ……47
第73図　トレンチ断面図 ……47
第74図　トレンチ掘削状況 ……47
第75図　トレンチ平面・断面図 ……47
第76図　トレンチ掘削状況 ……48
第77図　トレンチ断面図 ……48
第78図　トレンチ掘削状況 ……48
第79図　トレンチ断面図 ……48
第80図　トレンチ掘削状況 ……49
第81図　トレンチ断面図 ……49
第82図　トレンチ掘削状況 ……49
第83図　トレンチ断面図 ……49
第84図　トレンチ掘削状況 ……50
第85図　トレンチ断面図 ……50
第86図　トレンチ掘削状況 ……50
第87図　トレンチ断面図 ……50

図　版　目　次

図版１　麻田藩陣屋跡第11次調査
（１）調査区全景（北東から）
（２）礫出土状況（西から）
図版２　麻田藩陣屋跡第11次調査
（１）調査区西壁断面（南半部）
（２）ＳＰ－１断面
（３）ＳＰ－30断面
図版３　本町遺跡第27次調査
（１）調査区全景（北から）
（２）柱穴列２－ｃ掘削状況（南から）
図版４　本町遺跡第27次調査
（１）竪穴住居完掘状況（北東から）
（２）造り付けカマド検出状況（南から）
図版５　本町遺跡第27次調査　出土遺物
（１）竪穴住居（第11図）
（２）井戸（第13図４）
（３）井戸（第13図５）
（４）ピット１（第13図６）
図版６　新免遺跡第53次調査
（１）調査区全景（南東から）
（２）溝１遺物出土状況（北から）
図版７　新免遺跡第53次調査
（１）土坑１遺物出土状況（南から）
（２）溝１（第19図１）
（３）溝１（第19図４）
（４）土坑１（第19図５）
（５）土坑１（第19図８）
図版８　新免遺跡第54次調査
（１）調査区全景
（２）木棺墓１・土坑１近景
図版９　新免遺跡第54次調査
（１）木棺墓１（東から）
（２）木棺墓１（南から）

図版10　新免遺跡第54次調査

（1）木棺墓1遺物出土状況

（2）土坑1

図版11　新免遺跡第54次調査

（1）溝1

（2）第24図1

（2）第24図2

（4）第24図3

図版12　新免遺跡第55次調査

（1）調査区全景（西半部）

（2）調査区全景（東半部）

図版13　新免遺跡第55次調査

（1）竪穴住居完掘状況（南西から）

（2）竪穴住居小穴列［西辺壁溝部分］（南から）

図版14　新免遺跡第55次調査　出土遺物

（1）竪穴住居柱穴1（北から）

（2）掘立柱建物柱穴（南から）

（3）上段：土坑2（第31図1）

（3）下段：同天井部ヘラ記号

図版15　曽根遺跡第7次調査

（1）調査区全景（南から）

（2）外堀（南から）

図版16　曽根遺跡第7次調査

（1）土坑1

（2）出土遺物（第38図）

第Ⅰ章　位置と環境

1．地理的環境

豊中市は、西は猪名川を介して兵庫県と、南の大阪市とは神崎川を介してそれぞれ接している。ここで市内の地形を概観すると、北西部に待兼山丘陵が、北東部は大阪層群の模式地として知られる千里丘陵が広がる。中部は通称豊中台地と呼ばれる中・低位段丘地が展開し、南部から西部にかけては神崎川や猪名川、天竺川などをはじめとする河川の沖積作用によって形成された沖積低地が広がっている。このうち、中～北部の丘陵部については、明治14年発行の陸軍陸地測量部作成の仮製地形図をみると、かつては現在とは想像つかないほどの起伏に富んだ地形を呈していたことがうかがえる。また、市内最高点であった島熊山（標高132m）が万葉集に、待兼山丘陵が古今和歌六帖に謳われたように、北部一帯が古代以来景勝の地であったことも想像に難くない。

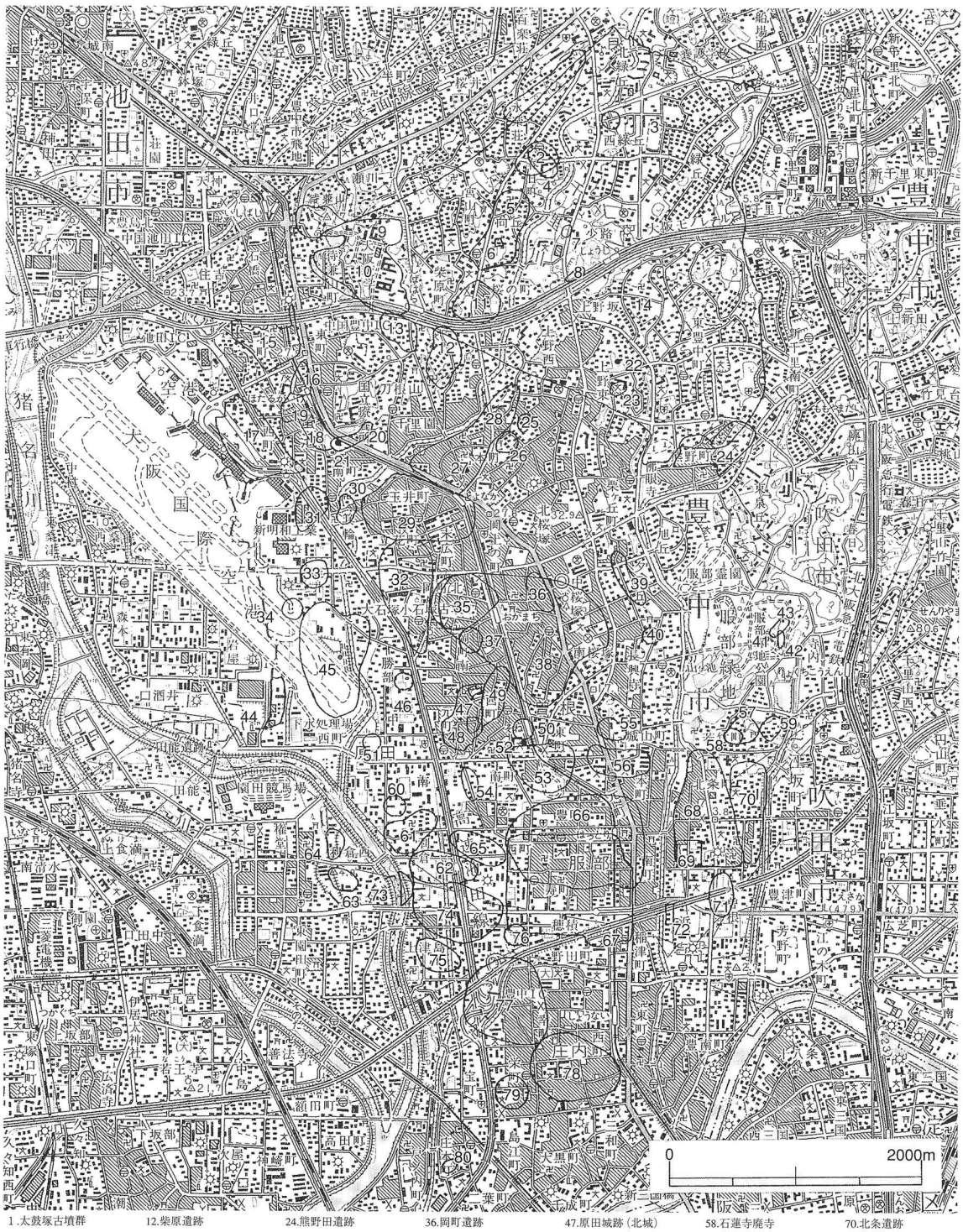
しかしながら、明治43年に箕面有馬電気軌道（後の阪急電鉄宝塚線）が開通すると、その沿線地域から土地開発が始まり、旧地形が徐々に損なわれることになる。戦後、特に高度経済成長期以降の大阪国際空港の整備、名神・中国自動車道路、阪神高速道路などの開通は、市域全体が広域な交通の利便性に恵まれた環境下に置かれることとなり、市内の大規模な地形改変に加え、人口集中化に拍車をかけることとなった。このような結果、現在豊中市は大阪市北郊でも有数の住宅都市としての地位を築いている。

今回、第Ⅱ章で報告する麻田藩陣屋跡は待兼山丘陵西端から派生する低位段丘上に立地し、第Ⅲ章本町遺跡及び第Ⅳ～Ⅵ章の新免遺跡は、千里川左岸の低位段丘上に立地する。第Ⅶ章で取り上げる曽根遺跡は豊中台地南西部から派生する舌状丘陵の末端部に位置する。

2．歴史的環境

ここでは、今回報告する遺跡に関連する時代について、主に集落の動向を中心に述べていく。

弥生時代　前期は、千里川水系では勝部遺跡が、天竺川水系では小曽根遺跡がそれぞれ中核的な集落であった可能性が考えられる。中期になると、前期の中核的集落から分村した新たな集落の中から次第に成長を遂げるものがみられる。新免遺跡はその代表例といえ、中期末に最盛期を迎える。中期末～後期は、蛍池北遺跡や勝部遺跡、小曽根遺跡などかつての中核的集落の多くの様相が把握しにくくなる一方で、新免遺跡のように中期から存続する集落もみられる。その新免遺跡の周囲では山ノ上遺跡や本町遺跡などの分村が誕生する一方、曽根遺跡のように母体となる集落が明確でない遺跡も出現しており、かつての中核的集落はピークを過ぎ、代わってその周辺に新たな集落が現われる傾向がうかがえる。このように後期は、物資の流通等を通じて形成された中期以来の流通システムの解体もしくは再編成ともいうべき大きな変化をみせる。終末期にな



1.太鼓塚古墳群
2.野畑春日町古墳群
3.野畑遺跡
4.野畑春日町遺跡
5.少路遺跡
6.武蔵国岡部藩安部氏桜井谷陣屋跡
7.桜井谷石器散布地
8.羽鷹下池南遺跡
9.待兼山古墳
10.待兼山遺跡
11.内田遺跡
12.柴原遺跡
13.北刀根山遺跡
14.桜井谷窯跡群
15.蛍池北（宮の前）遺跡
16.蛍池東遺跡
17.蛍池西遺跡
18.蛍池遺跡
19.麻田藩陣屋跡
20.南刀根山遺跡
21.御神山古墳
22.上野遺跡
23.青池古墳
24.熊野田遺跡
25.金寺山廃寺
26.新免宮山古墳群
27.金寺山廃寺塔利柱礎石
28.本町遺跡
29.新免遺跡
30.箕輪東遺跡
31.箕輪遺跡
32.山ノ上遺跡
33.勝部北遺跡
34.走井遺跡
35.岡町北遺跡
36.岡町遺跡
37.岡町南遺跡
38.桜塚古墳群
39.下原窯跡群
40.長興寺遺跡
41.梅塚古墳
42.埴輪散布地
43.大坂城鉄砲奉行支配焔硝蔵跡
44.原田西遺跡
45.勝部遺跡
46.勝部東遺跡
47.原田城跡（北城）原田城跡（南城）
48.原田遺跡
49.曽根遺跡
50.曽根東遺跡
51.原田中町遺跡
52.曽根埴輪窯跡
53.豊島北遺跡
54.曽根南遺跡
55.城山遺跡
56.服部遺跡
57若竹町遺跡
58.石蓮寺廃寺
59.寺内遺跡
60.利倉北遺跡
61.利倉遺跡
62.利倉南遺跡
63.利倉西遺跡
64.椎堂の前遺跡
65.服部西遺跡
66.穂積遺跡
67.穂積村囲堤
68.小曽根遺跡
69.春日大社南郷目代今西氏屋敷
70.北条遺跡
71.小曽根南遺跡
72.上総国飯野藩保科氏浜陣屋跡
73.上津島川床遺跡
74.上津島遺跡
75.上津島南遺跡
76.穂積ポンプ場遺跡
77.島田遺跡
78.庄内遺跡
79.島江遺跡
80.庄本遺跡

第１図　市内遺跡分布図（１：50,000）

ると、勝部遺跡や小曽根遺跡は集落の実態が再び浮かび上がる一方で、南部を中心とした地域では穂積遺跡、上津島川床遺跡などの大規模な集落が誕生しており、中小集落主体の後期とは明らかに異なる。こうした動きの背景には、気候の安定化によってもたらされた可耕地の増加、東西各地域の搬入土器からうかがえる流通網の活発化などが可能性として考えられる。

古墳時代　古墳時代前期の集落は、穂積遺跡、小曽根遺跡、島田遺跡、上津島遺跡などが知られ、その多くが弥生時代終末期に成立した集落の立地をほぼ踏襲している。このような傾向は、中～北部の様相が今なお不明瞭である点を考慮すべきであるが、それでも南部偏重であることには変わりない。これは、弥生時代終末期に成立したとみられる広域流通網が維持された結果とも考えられる。中期になると、南部では島田遺跡、利倉西遺跡、上津島遺跡など前期以来の集落が存続するのに対し、中～北部の集落は蛍池東遺跡、新免遺跡を除いて依然様相が明らかでない。同じ頃、中部の豊中台地上では前期後半段階に始まる桜塚古墳群の築造が本格的に開始し、集落でなく墓域としての展開が目立つようになる。北部の蛍池東遺跡で検出された大形倉庫群の出現は、その規模からみて政治的権力を抜きにしては考えにくく、桜塚古墳群の被葬者との関連も指摘されている。後期になると千里川流域の集落が拡大をみせる。上流域では付近の豊富な燃料と良質な粘土を背景に成立した桜井谷窯跡群の操業が最盛期を迎え、右岸に立地する内田遺跡、柴原遺跡、左岸の羽鷹下池南遺跡、今回報告する本町遺跡や新免遺跡は、同窯跡群における須恵器生産～流通に携わった工人の集落とみられている。

古代　桜井谷窯跡群の隆盛に合わせて成立した千里川流域の集落のうち、本町遺跡は飛鳥～奈良時代頃まで断続的に存続するのに対し、隣接する新免遺跡は遺構が散発的でありその存続時期が明確でない。この背景としては、本町遺跡が飛鳥時代創建といわれる金寺山廃寺に関連する集落であったことが考えられる。

一方、平安前期の大形掘立柱建物群が検出された曽根遺跡は、周辺の一般的な集落とは様相を異にしており、官衙関連機関もしくは有力氏族の居宅としての性格がうかがえる。

中世　丘陵地の中世集落としては、蛍池東遺跡、麻田藩陣屋跡、山ノ上遺跡、本町遺跡、新免遺跡などが知られているが、その成果は断片的であり詳細は明らかでない。

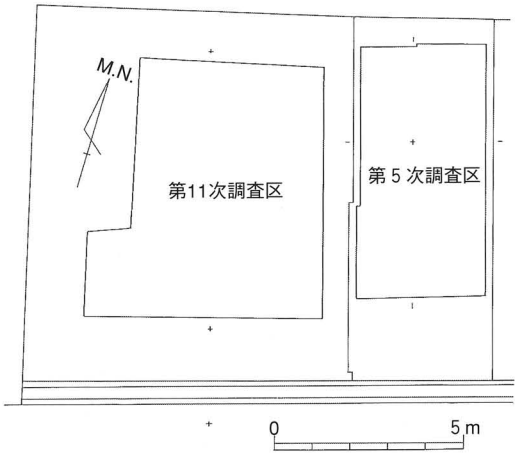
このような中で麻田藩陣屋跡の調査では、中世後期段階の遺構が検出され、近世の陣屋に先立つ集落として注目される。曽根遺跡では原田城北城にともなう中世後期段階の堀が検出された。北城は16世紀後半頃に織田信長側が有岡城攻略時の出城の一つとして利用されたことも知られており、今回検出された堀は、中世後期段階の城郭の変遷を知るうえで貴重である。

第２図　調査地点と周辺の地形（１：50,000）

第Ⅱ章　麻田藩陣屋跡第11次調査

1．調査の経緯

当調査区は豊中市蛍池中町３丁目32－14、32－28、32－30、32－31に所在する。個人店舗の建設に伴い、確認調査を実施したところ、地表下約60cmのところで遺構面を検出した。遺構の損壊は避けられないことが判明し、協議を行った結果、平成14年（2002年）６月17日から７月10日の日程で発掘調査を行うことになった。

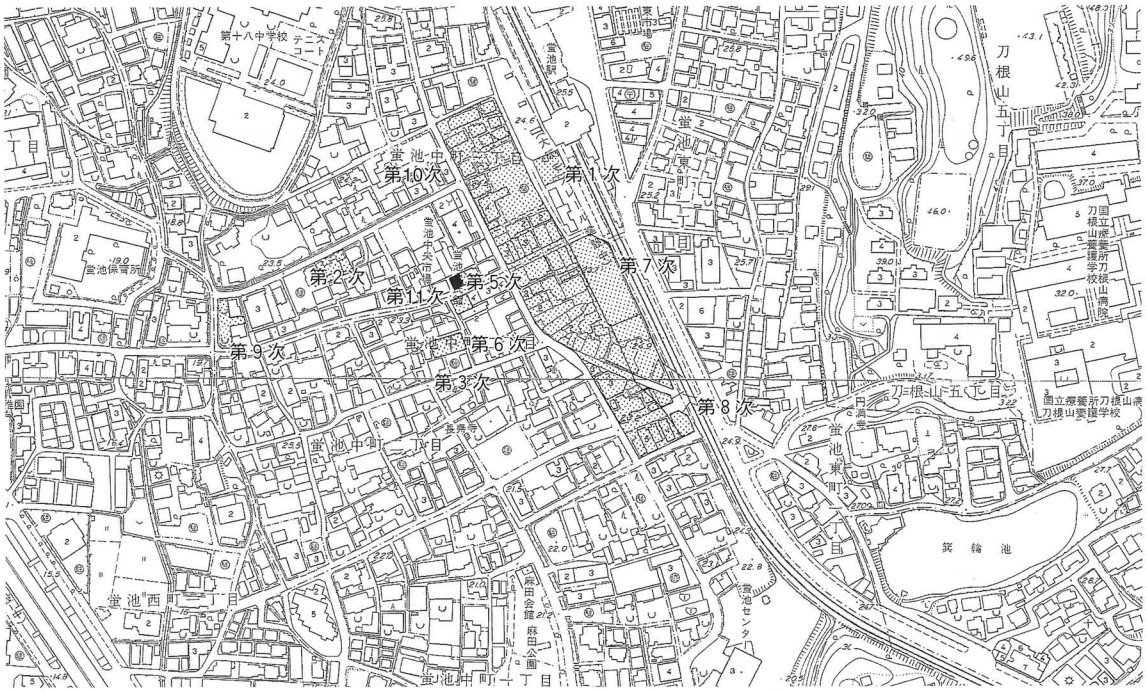


第３図　調査範囲図（１：200）

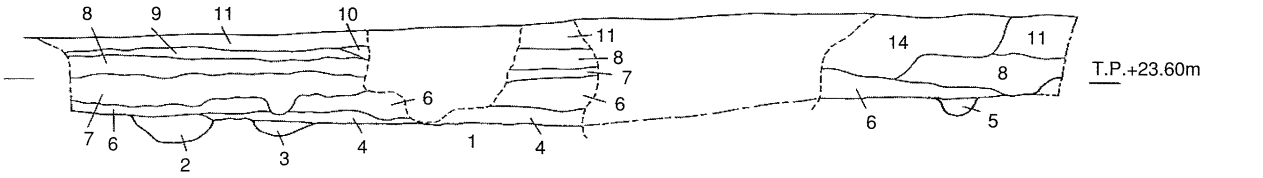
2．調査の概要

（1）基本層序

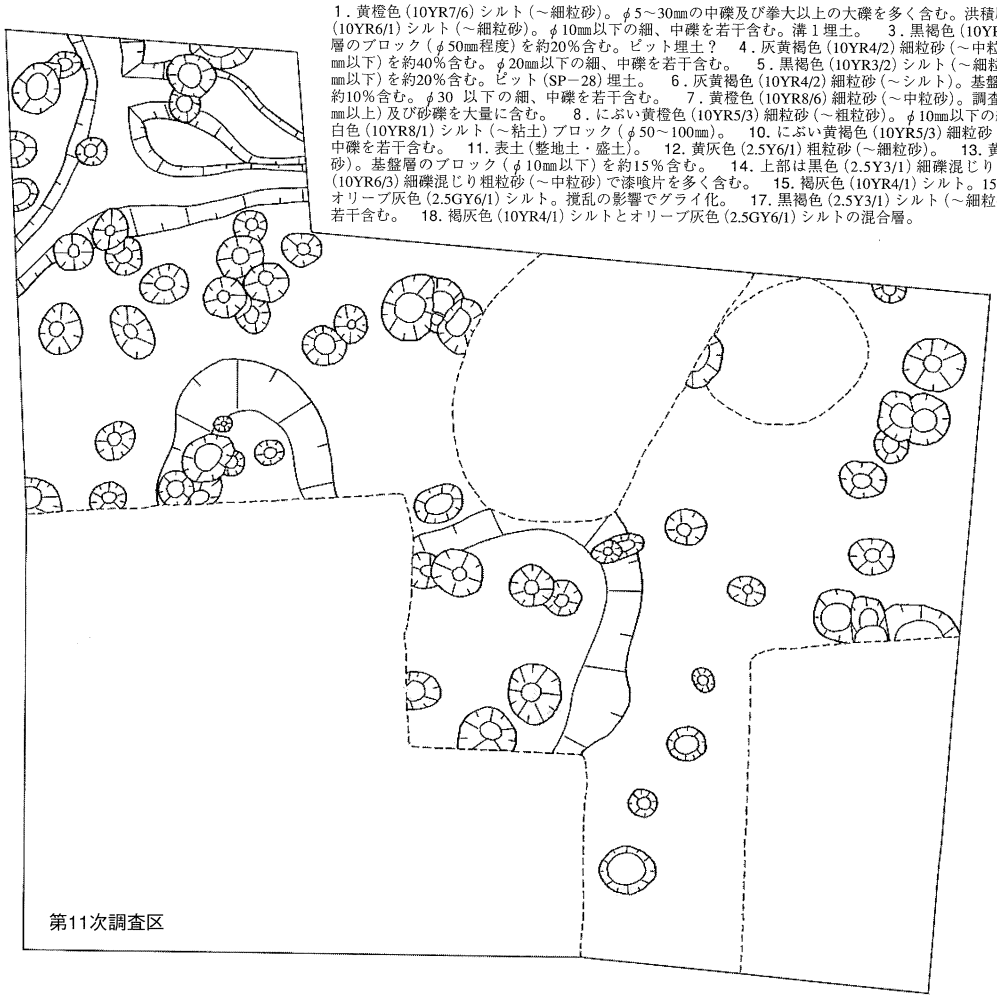
当調査区は、千里丘陵西端部の低位段丘面に位置する。調査区の西、南方は段丘崖から沖積低地へつらなる緩やかな斜面を形成している。このため、当調査区周辺では後期旧石器時代以来、生活面となっていた洪積層上面が、中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境

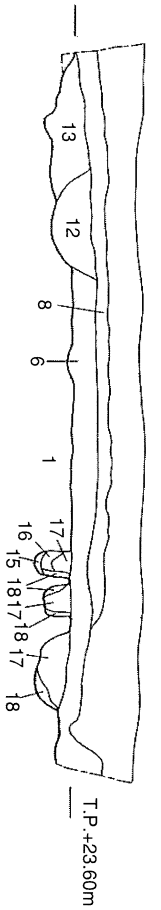


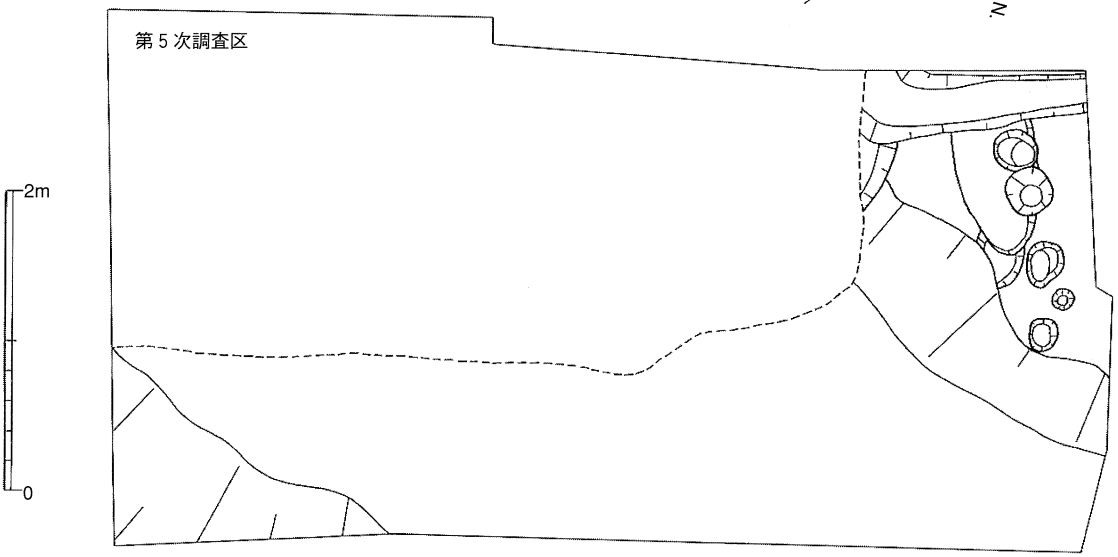
第４図　調査地位置図（１：5,000）



1．黄橙色（10YR7/6）シルト（～細粒砂）。φ5～30㎜の中礫及び拳大以上の大礫を多く含む。洪積層上部。基盤層。　2．褐灰色（10YR6/1）シルト（～細粒砂）。φ10㎜以下の細、中礫を若干含む。溝１埋土。　3．黒褐色（10YR2/2）シルト（～細粒砂）。基盤層のブロック（φ50㎜程度）を約20％含む。ピット埋土？　4．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂（～中粒砂）。基盤層のブロック（φ50㎜以下）を約40％含む。φ20㎜以下の細、中礫を若干含む。　5．黒褐色（10YR3/2）シルト（～細粒砂）。基盤層のブロック（φ20㎜以下）を約20％含む。ピット（SP－28）埋土。　6．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂（～シルト）。基盤層のブロック（φ30㎜以下）を約10％含む。φ30 以下の細、中礫を若干含む。　7．黄橙色（10YR8/6）細粒砂（～中粒砂）。調査区南半部では亜角礫（長軸100㎜以上）及び砂礫を大量に含む。　8．にぶい黄橙色（10YR5/3）細粒砂（～粗粒砂）。φ10㎜以下の細、中礫を若干含む。　9．灰白色（10YR8/1）シルト（～粘土）ブロック（φ50～100㎜）。　10．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂（～粗粒砂）。φ20㎜以下の細、中礫を若干含む。　11．表土（整地土・盛土）。　12．黄灰色（2.5Y6/1）粗粒砂（～細粒砂）。　13．黄灰色（2.5Y6/1）粗粒砂（～細粒砂）。基盤層のブロック（φ10㎜以下）を約15％含む。　14．上部は黒色（2.5Y3/1）細礫混じり粗粒砂、下部はにぶい黄橙色（10YR6/3）細礫混じり粗粒砂（～中粒砂）で漆喰片を多く含む。　15．褐灰色（10YR4/1）シルト。15～18層は各ピット埋土。　16．オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト。攪乱の影響でグライ化。　17．黒褐色（2.5Y3/1）シルト（～細粒砂）。φ10㎜以下の細、中礫を若干含む。　18．褐灰色（10YR4/1）シルトとオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルトの混合層。







第５図　調査区平面・断面図（1：50）

にあり、江戸初期の青木氏による陣屋建設に至って段丘平坦面上部の堆積層が削平され、大半の遺構が消滅したものと考えられる。しかしながら、調査区周辺を周囲の地形から独立させた山所池（現市立第18中学校）などの開析谷をはじめ、段丘平坦面から斜面には小支谷が多く、起伏があった。このため、陣屋建設時にも盛土造成が行なわれた場所が存在し、こうした地域では古墳後期あるいは中世の遺構面及び包含層などが遺存する条件に恵まれたわけである。当調査区でも、洪積層上に中世の遺構群及び包含層が検出され、その後陣屋建設時の盛土・整地土層が堆積していることが確認されたが、付近に顕著な斜面や埋没した谷地形の存在が考えられないため、盛土造成された原因は他に起因することが考えられる。

（2）検出した遺構

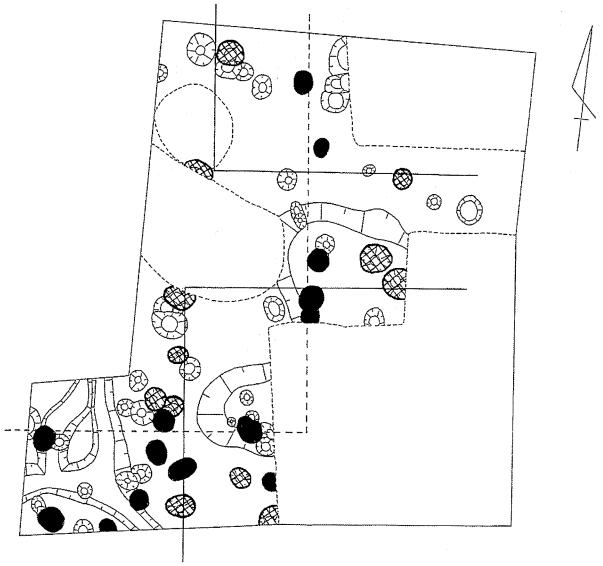
調査区からは、60基を超える柱穴群と溝３条、土坑２基を検出した。以下、主要な遺構について、概要を述べることにする。

柱穴群　調査区全体で洪積層上面から検出した。柱穴は直径及び深さ30cm前後を測るものが大半を占めるが、検出面からの深さが約50cmに到達するものもある。埋土は褐灰色～黒褐色系のシルト質土で構成され、柱痕を伴う場合が多い。比較的深度の浅い柱穴では、底部に扁平な礫を伴うものが検出された。深度の深い柱穴でもその中層に同様の礫を含むものが見られ、礫を挟んで上下に柱痕が検出されている。礫の検出深度がほぼ同じであるため、もともと掘立柱建物であったものが礎石立ちの建物に建て替えられた可能性が高い。柱穴の埋土からは瓦器椀、青磁椀、土師器皿等の破片が出土したが、微細な破片であることから図示しなかった。時期は概ね13～14世紀に該当する。

土坑　土坑は調査区の中央付近で検出された。土坑の形状は不定形で深さ約10cmを測り、２基ともに人頭大の角～亜角礫が埋土中に多く含まれる。またその礫のうち数点は被火して破砕していた。土師器の微細な破片が出土しているが、時期比定の可能な遺物は出土していないため、時期については不明である。柱穴群との重複関係では後出する。

溝　調査区南西部で検出した。不定方向に掘削され、幅約40cmを測り、深さは20cmに満たない。溝からは遺物が微量しか出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、へそ皿の破片が含まれ14～15世紀に該当する可能性が考えられる。

当調査区の東側に隣接する第５次調査でも、今回の調査同様、２種類の柱穴や溝が検出されている。しかしながら、調査区の大部分が河川（？）の堆積物で占められており、当調査区で検出された遺構群との有機的な関連については明確にすることができなかった。この河川（？）は第５次調査では北東から南西方向に検出されているが、当調査区及び南側の第６次調査では検出されていない。出土遺物から時期的には当調査区で検出された溝や土坑と同時期の所産とみなすことができるが、その性格については埋土の特徴を勘案しても河川とは言いがたい。現状では小規模な溜池状の遺構である可能性を指摘するに留めておく。



第６図　建物配置復元図

３．まとめ

今回の調査成果をまとめると、当調査区周辺では13～14世紀に掘立柱建物及び礎石建物からなる集落が成立しており、その後14～15世紀に集落は一旦廃絶し、麻田藩陣屋の建設以前に耕地化（？）した可能性が考えられる。掘立柱建物（柱穴黒塗り）と礎石建物（柱穴斜線）の配置復元をあくまで推定ではあるが左図に示した。

当調査区は、麻田藩陣屋絵図によると藩主邸の表門から玄関に至る空閑地に該当する。この藩主邸の敷地は麻田藩陣屋建築時に祝正治より譲り受けたものとされ、17世紀初頭以前は屋敷地であった可能性が高い。しかしながら、その時期に該当する遺構は検出されず、中世の建物群との直接的な移行関係を確認することはできなかった。

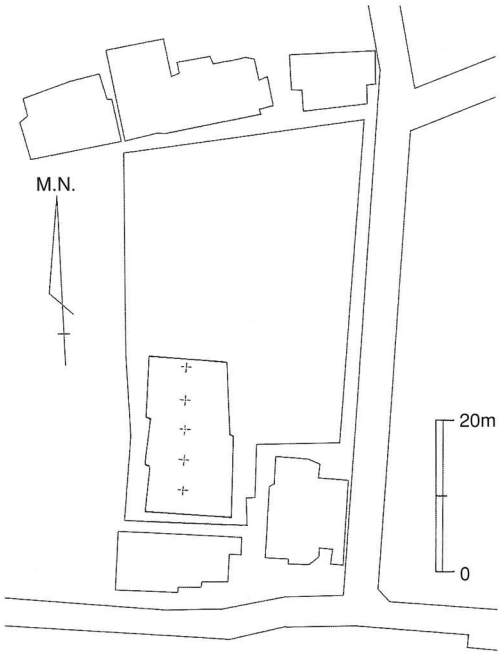
なお、麻田藩陣屋の外堀より内側でありながら、中世の遺構面が良好に保存されるほど盛土造成が行なわれていた原因は、藩主邸の基底が周辺より相当高く設定されていたことによるものと推定される。麻田藩陣屋絵図では盛土の状況までを読み取ることができないが、調査成果からその蓋然性は高いものと考えられる。

今後の周辺の調査では、中世後期から戦国時代にかけての遺構の変遷が明確にされ、文献との正確な対比が可能になることが期待される。

第Ⅲ章　本町遺跡第27次調査

1．調査の経緯

当該調査地点は、豊中市本町４丁目159－１に所在する。平成14年３月12日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて確認調査を行なったところ、地表下約１ｍで遺構検出面を確認した。申請地では共同住宅の建設が予定されており、基礎掘削時に遺構の損壊は免れないことが判明したため、協議の結果、建設予定地のうち、遺構が確認された範囲を中心に本調査を実施することとなった。なお、調査期間は平成14年５月20日から平成14年６月24日であり、調査面積は196㎡である。

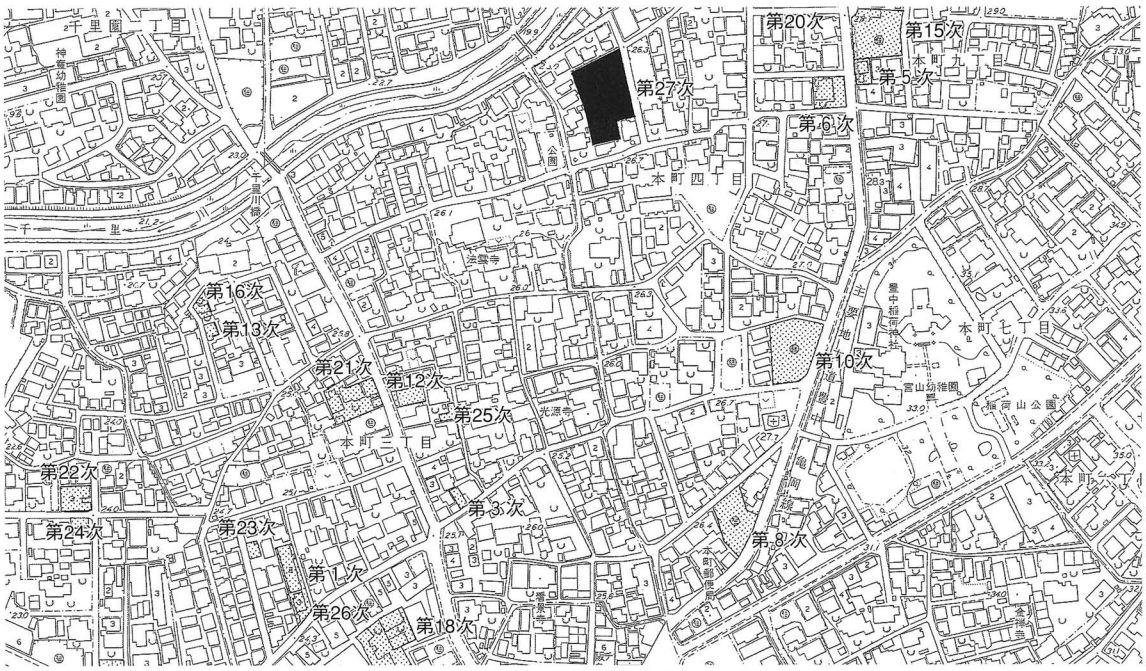


第７図　調査範囲図（１：1,000）

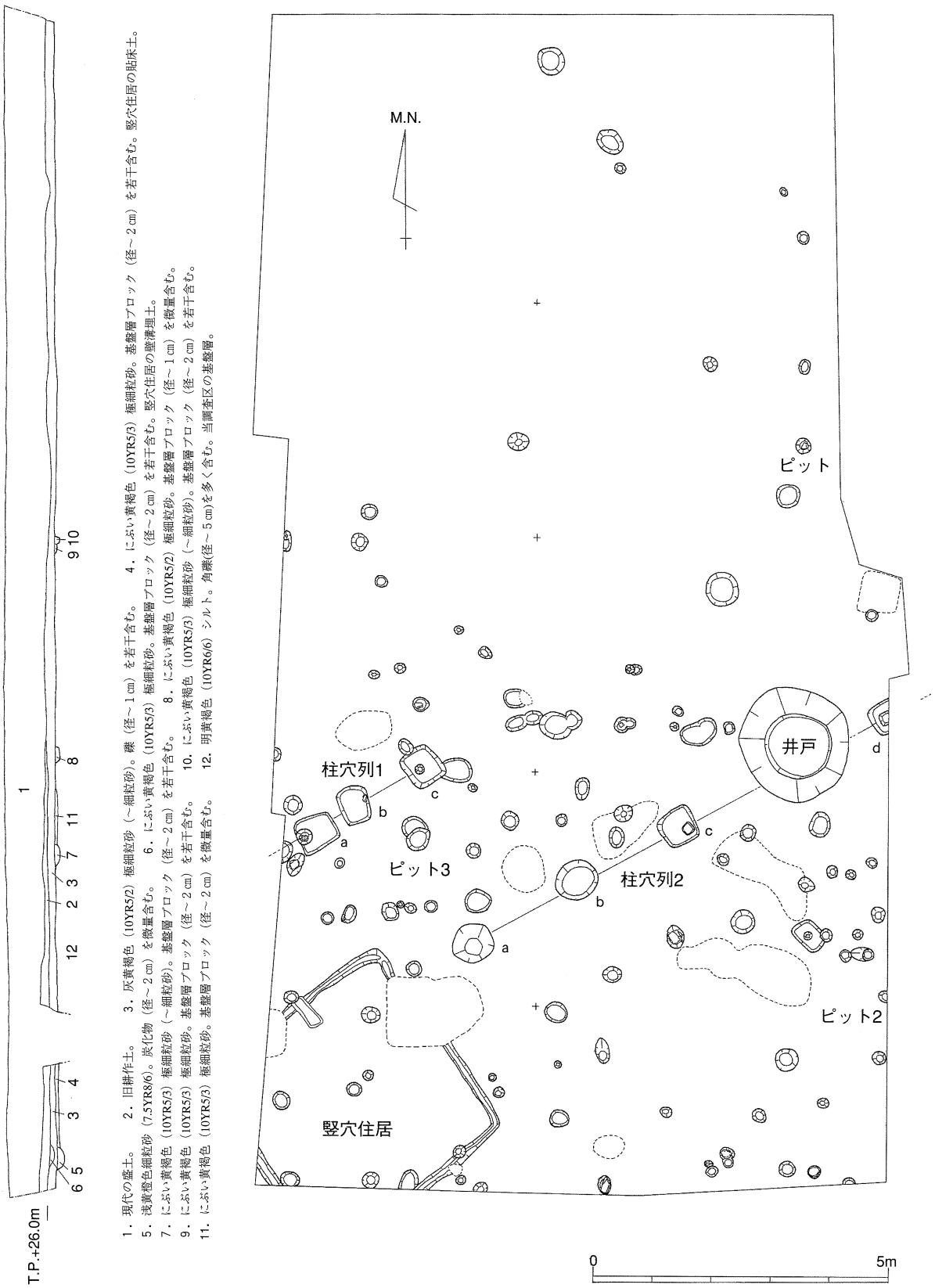
2．調査の概要

（1）基本層序

今回の調査地は、１層：盛土および撹乱土、２層：旧耕作土、３層：灰黄褐色極細粒砂、４層：黄灰色シルトの順に堆積する。３層は瓦器椀片等を包含することから中世以降の耕作土と



第８図　調査地位置図（１：5,000）



1．現代の盛土。　2．旧耕作土。　3．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂（～細粒砂）。礫（径～1㎝）を若干含む。　4．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。竪穴住居の貼床土。
5．浅黄橙色細粒砂（7.5YR8/6）。炭化物（径～2㎝）を微量含む。　6．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。竪穴住居の壁溝埋土。
7．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂（～細粒砂）。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。　8．にぶい黄褐色（10YR5/2）極細粒砂。基盤層ブロック（径～1㎝）を微量含む。
9．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。　10．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂（～細粒砂）。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。
11．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～2㎝）を微量含む。　12．明黄褐色（10YR6/6）シルト。角礫(径～5㎝)を多く含む。当調査区の基盤層。

第９図　調査区平面・断面図（１：100）

みられる。4層は当調査地の基盤層、および遺構検出面であり、拳大の角礫を非常に多く含む。

今回は、4層上面において遺構を検出し調査を実施した。

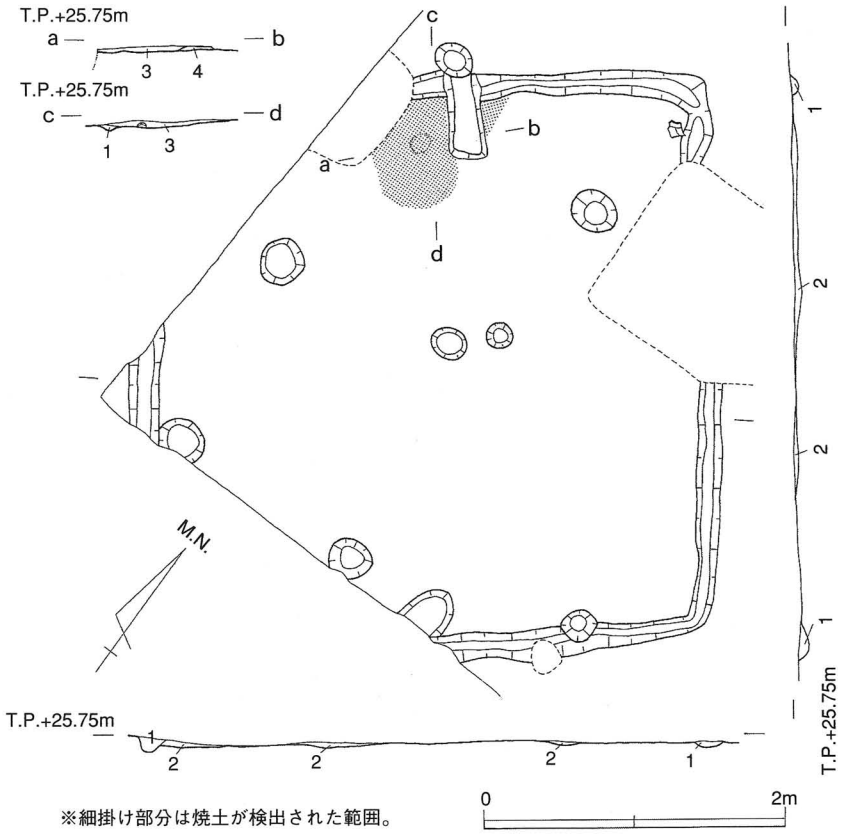
（2）検出した遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居1基をはじめ、柱穴列、柱穴約100基、井戸等である。以下、主要な遺構について報告する。

竪穴住居　調査区南西端で検出した、一辺3.8mをはかるほぼ正方形の竪穴住居（以下、「住居」と略す）である。南西部分は調査区外のため不明である。周囲には幅10～15cm、深さ3～5cmの壁溝が巡る。住居内では、にぶい黄褐色細粒砂に基盤層ブロックを含んだ貼床土（第10図2層）が確認されている。

住居内では直径20～30cm程度の柱穴が8基検出されたが、いずれも均等な配置に収まるものではなく、主柱穴とみとめられるものは確認されていない。

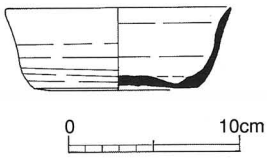
住居北辺沿いの中央部分では炭化物と焼土ブロック中に土師器細片が混ざった土の広がり（網掛け部分）とともに、造り付けカマドの一部を検出した。このカマドは、撹乱を受けているため右袖部分の検出にとどまり、さらに残存高も3cmに満たない。遺存した右袖部分、および焼土の広がりから、このカマドが最大幅25cm、長さ約70cmをはかり、燃焼部の残存幅は60cm以上とみられる。燃焼部の中央部分（第10図：網掛け部分の波線内）は赤く変色しており、熱を



※細掛け部分は焼土が検出された範囲。

1．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂（～細粒砂）。基盤層ブロック（径～2cm）を若干含む。竪穴住居の壁溝埋土
2．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～2cm）を若干含む。貼床土。
3．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂。明赤褐色（5YR5/6）ブロック（径5～10mm）と、黒色（10YR2/1）ブロック（径～10mm）を多く含む。造り付けカマドの袖内埋土。
4．にぶい褐色（7.5YR5/2）極細粒砂。しまり強い。造り付けカマド袖部。

第10図　竪穴住居平面・断面図（1：50）



第11図　竪穴住居出土遺物（1：4）

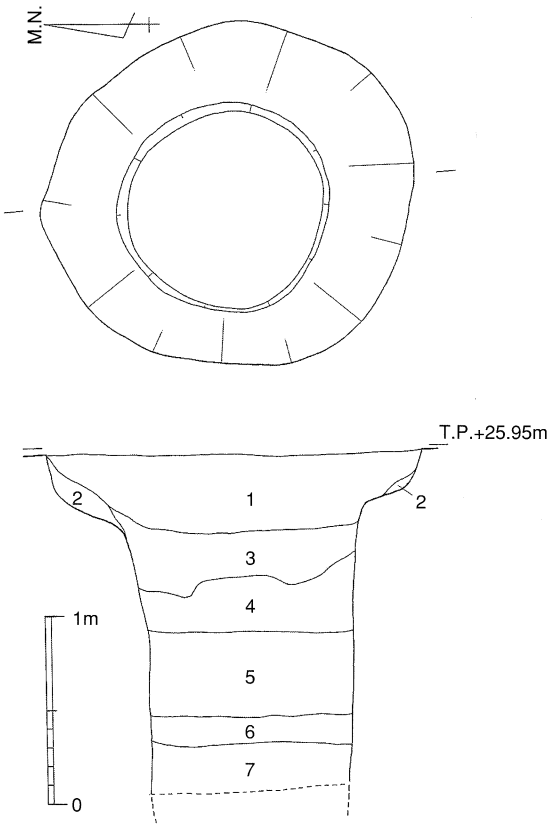
強く受けた部分と考えられる。

出土遺物は、住居北隅の埋土中から須恵器杯が出土している（第11図）。復元口縁13.4㎝、器高4.9㎝をはかり、上外方にまっすぐ伸びる口縁形態を有する。回転ヘラ削りは底部～体部下端部において認められる。８世紀後半代の所産とみられる。

柱穴列１　調査区南西部で検出した３基の柱穴列（柱穴列１：ａ～ｃ）である。各柱穴はおよそ長軸約0.8ｍ、短軸0.6ｍをはかる長方形の平面を呈し、それぞれ約0.2ｍの深度を有する。柱穴の間隔や軸方向にばらつきがみられることから、これらの柱穴がすべて同一時期に機能していたか不明である。なおこれらの柱穴は、本来建物の一部を構成していた可能性が考えられるものの、調査区内で相対する柱穴列が未確認であることから、柱穴列として報告した。埋土中出土の須恵器片は細片のため図化し得なかったが、少なくとも古墳時代後期以降の埋没が考えられる。

柱穴列２　調査区南半部において、平面方形もしくは楕円形を呈する４基の柱穴（柱穴列２：ａ～ｄ）が、南西から東西方向にほぼ同一主軸線上に並んで検出された。柱痕同士の間隔は2.0～2.1ｍ（ｃ－ｄ間は4.1ｍ）をはかる。ｃ－ｄ間の距離は、ａ～ｃ間のそれとほぼ等倍であることを考慮すると、ｃ－ｄの中間に柱穴列２と一連の所産とされる柱穴が存在した可能性が高いものの、井戸と重複しているためその存否は不明である。各々の柱穴は直径0.65～0.8ｍ、0.15～0.2ｍの深度を有し、柱痕はいずれも柱穴の中心からややずれた位置で確認されている。埋土中から土師器、須恵器が出土したが、細片かつ磨滅が著しく時期の特定には至らなかった。また、柱穴列２は柱穴列１とほぼ同一方向の主軸を有するものの、調査範囲の制約等もありその関連は不明である。

なお、既往の調査地（第６・20次調査）で検出された平面方形の柱穴群は、埋土中に奈良時代後半頃の遺物を伴っており、柱穴列１・２はこれらと類似



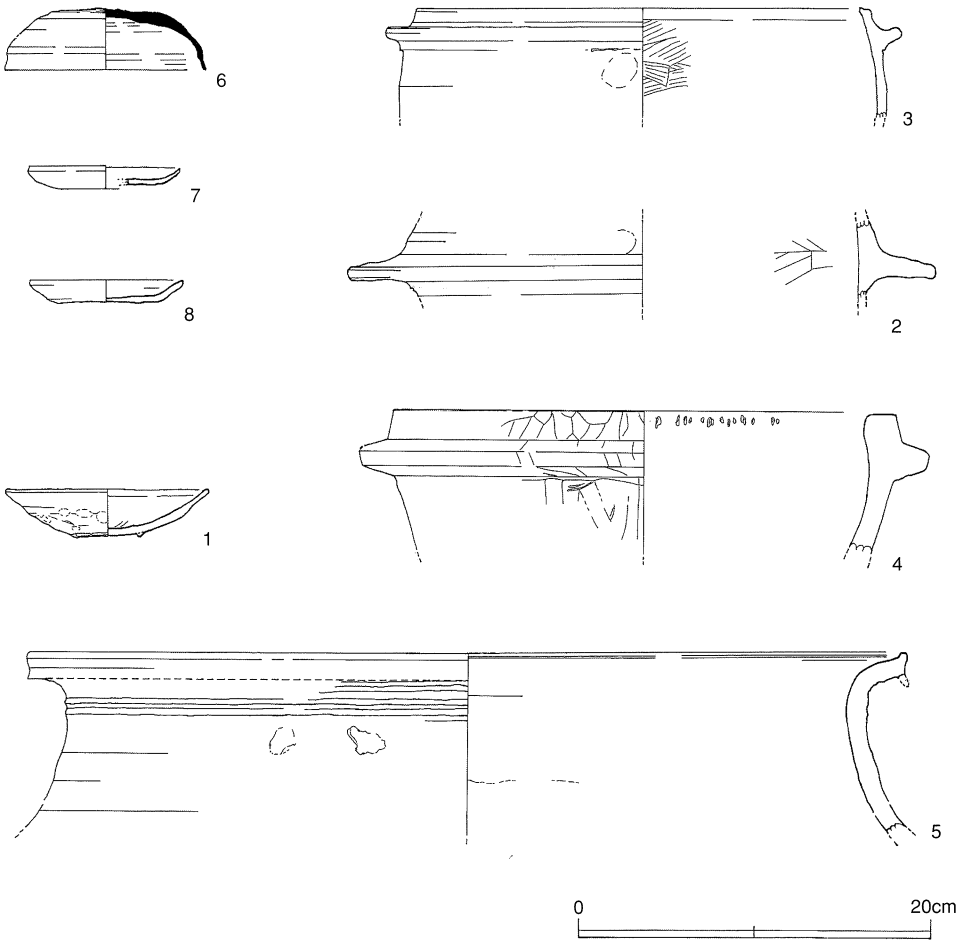
1．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂（～シルト）。礫（径～６㎝）を非常に多く含む。
2．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂。にぶい黄橙色（10YR6/4）極細粒砂ブロックを若干含む。
3．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂。にぶい黄橙色（10YR6/4）極細粒砂ブロックと極細粒砂暗褐色（10YR3/4）シルトブロックを若干含む。
4．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂（～シルト）。礫（径～５㎝）を若干含む。
5．黄褐色（10YR5/6）シルトとにぶい黄褐色（10YR5/3）シルトの混合土（１：１）。礫（径～３㎝）を少量含む。
6．灰黄褐色（10YR5/2）シルト。礫（径５～10㎝程度）を若干含む。
7．黄灰色（2.5Y4/1）極細粒砂（～シルト）。オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトブロック（径～３㎝）を微量含む。

第12図　井戸平面・断面図（１：40）

した形態であることから、周辺の調査成果を参考にすると、推測の域を出ないものの奈良時代以降の所産である可能性が考えられる。

井戸　調査区南東側で検出した。検出面における直径は2.4mをはかり、基底面までの掘削は行なっていないものの、検出面からは少なくとも２m以上の深度を有している。井戸はほぼ垂直に掘り込まれているものの、上端部分はラッパ状に開く形態である。今回の掘削深度内において埋土は上下２層に大別できる。上半部（１～６層）は褐色シルトにベースブロックが混ざるもので、拳大の礫を多数含む。下半部（７層～）は黄灰色シルト～極細粒砂にオリーブ灰色シルトブロックを若干含むもので、しまりが悪く礫はほとんどみられない。以上の所見から、井戸は二時期にわたって埋め戻されたことも考えられるが、上下層間で遺物に時期差が認められず、短期間で埋め戻されたものとみられる。

井戸埋土の各層からは若干の遺物が出土しているが、ここでは主要な遺物について報告する（第13図１～５）。１は和泉型瓦器椀である。口径11.4㎝、器高2.7㎝をはかり、底部には断面半円形の貼付高台を伴う。外面にはヘラミガキは認められないが内面の見込み部分において幅２㎜程度の斜位のヘラミガキが認められる。橋本編年ではⅣ－２期の所産とみられる。２は、瓦



第13図　出土遺物（１：４）

質の羽釜である。鍔部分の内面復元径は24cmをはかる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。3も瓦質の羽釜であり、傾きに疑問を残すものの復元口縁は25cmをはかる。2と比べて鍔も短く小形である。4は滑石製石鍋である。復元口縁28cm、残存高約8cmをはかる。口縁部下に削り出しの鍔がめぐるものであり、比較的安定した底部を有するものと考えられる。以上の特徴から、木戸氏の分類でいうⅢ－a類とみられる（木戸　1995）。5は常滑焼大甕とみられる。復元口径49cmをはかり、口縁端部は一部欠損しているものの上下に伸びる形態になるものとみられる。なお、今回図化していないが、5と同一個体とみられる体部屈曲部分の破片も出土している。

1～5の特徴などから、井戸は少なくとも13世紀代以降に埋没した可能性が考えられる。

その他の出土遺物　上記遺構の他に、主に柱穴中から若干の遺物が出土している（第13図6～8）。以下では、図化し得た遺物について報告する。6はピット1出土の須恵器杯蓋である。口径11.2cm、器高3.4cmをはかる。やや丸味を帯びた天井部を有し、ヘラ削りの範囲も3分の1程度である。7・8はそれぞれピット2・3出土の土師器小皿である。口径、器高は各々8.5cm、1.3cmをはかる。いずれも体部下半は指押さえ、上半は二段ナデの調整を施し、色調は淡橙色を呈する。

3．まとめ

今回の調査では、遺構密度が北側に向かって希薄になっていくことが確認され、調査地周辺が集落縁辺部であったことがまず考えられる。このような遺構分布は、調査地のすぐ北方に千里川にともなう段丘崖を控えているという地形的な制約が背景の一つになっているのであろう。

調査では7～8世紀代、および12世紀後半～13世紀代の遺物を包含する遺構が主体を占めていた。したがって調査地とその周辺は、当該時期の集落範囲と考えられるが、古墳時代の須恵器も一定量出土しており、すでに、これらに先だって付近に古墳時代後期段階の集落が所在していたものとみられる。

柱穴列1・2を構成する柱穴群は、周辺調査地（第6次・20次）で確認されている8世紀後半代の掘立柱建物の柱穴と形態や規模が比較的似通っていることから、断定はできないが、当該時期の所産である可能性が考えられる。また、竪穴住居内出土の須恵器杯（第11図）は8世紀代の特徴を有するものである。畿内の集落は、一般に7世紀以降は竪穴住居からほぼ掘立柱建物集落に移行していることが指摘されているが、わずかながら当該時期の竪穴住居が検出されている（広瀬　1983）。今回検出された竪穴住居が8世紀後半代の帰属となると、豊中とその周辺地域における竪穴住居の存続時期を考えるうえでの重要な資料といえる。

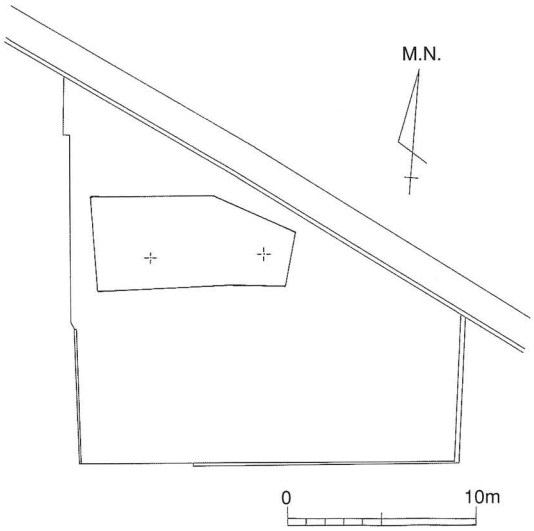
【参考文献】

木戸雅寿　1995　「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』　真陽社
広瀬和雄　1983　「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館

第Ⅳ章　新免遺跡第53次調査

1．調査の経緯

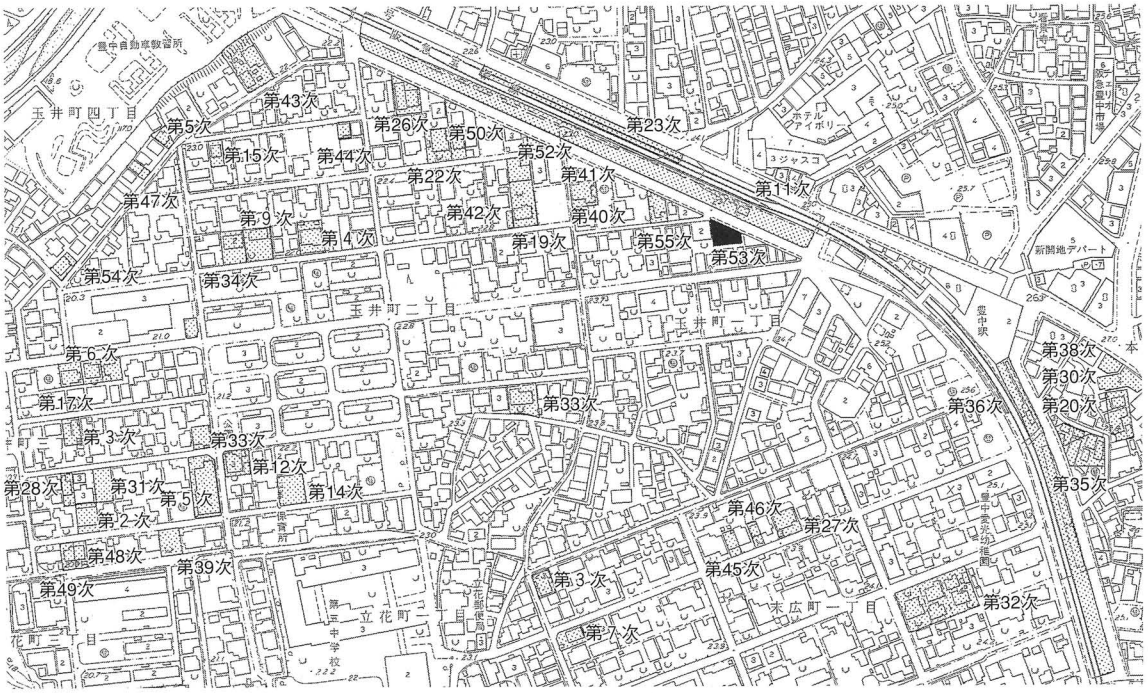
調査地は豊中市玉井町２丁目252、253、253－２に所在する。平成13年11月６日に提出された埋蔵文化財発掘の届け出に基づいて確認調査を実施したところ、地表下約20㎝で溝状遺構を確認した。申請地は店舗ビルの建設が予定されており、それに伴う杭打設工事の際に遺構の損壊は免れないことが判明したため、協議の結果、溝状遺構の所在が確認されたトレンチ周辺において本調査を実施することとなった。なお、調査面積は51㎡、調査期間は平成13年11月20日～平成13年11月30日であった。



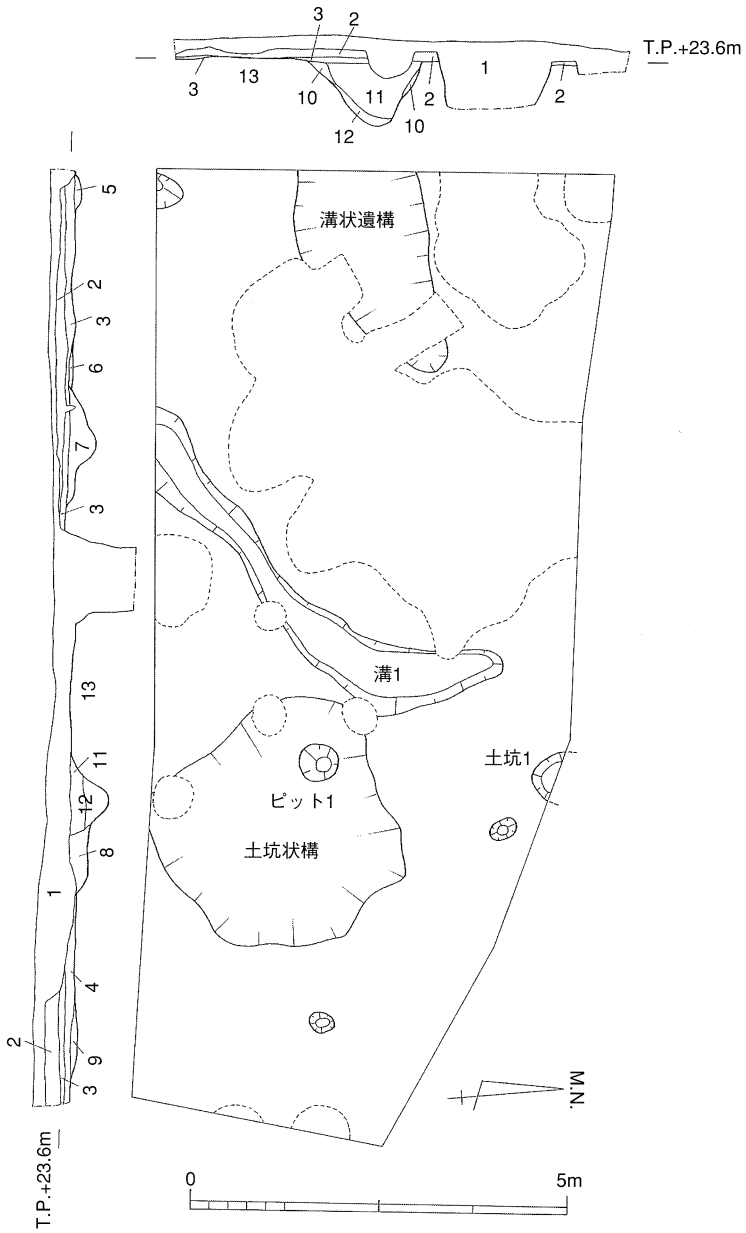
第14図　調査範囲図（１：400）

2．調査の概要

（1）基本層序



第15図　調査地位置図（１：5,000）



1．現代の盛土および撹乱土。　2．旧耕作土。　3．灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂。
4．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂と灰黄褐色（10YR6/2）極細粒砂の混合土（1：1）
5．暗褐色（10YR3/3）シルト。基盤層ブロック（径～1㎝）を若干含む。
6．褐灰色（10YR5/1）シルト。　7．褐灰色（10YR4/1）シルト。炭化物を少量含む。
8．褐灰色（10YR5/1）シルト。　9．褐灰色（10YR5/1）シルト。
10．灰黄褐色（10YR6/2）シルト（～極細粒砂）。
11．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。炭化物を少量含む。
12．にぶい黄橙色（10YR7/2）極細粒砂（～シルト）。
13．灰白色（2.5Y8/2）極細粒砂（～細粒砂）。しまり弱い。当調査地の基盤層。

第16図　調査区平面・断面図（1：80）

今回の調査地は、基盤層上面までの深度が20㎝程度と非常に浅く、旧建物の基礎掘削時の削平が著しかったため、基本層序は良好に残存していない。その中で部分的に確認できた箇所から概ね以下のような堆積状況を示す。

1層：盛土、2層：旧耕作土、3層：灰黄褐色極細粒砂、4層：にぶい黄褐色極細粒砂（～シルト）、5層：灰白色極細粒砂の順に堆積する。3層は瓦器椀・土師器細片等を含む。4層は須恵器片等を含む遺物包含層であるが、後世の削平によって部分的に薄く堆積するのみである。5層は当調査区の基盤層に相当する。

今回は基盤層（5層）上面において遺構を検出し調査を実施した。

（2）検出した遺構

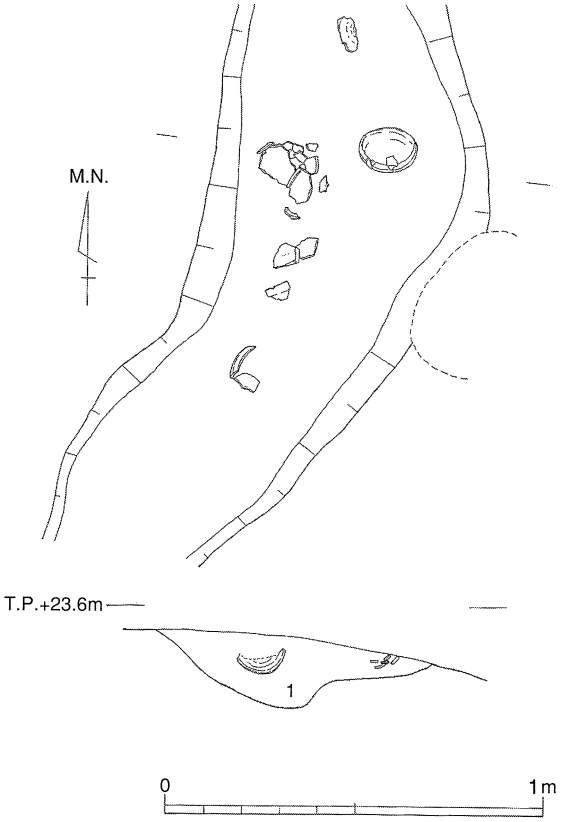
今回の調査では、溝や土坑、ピットなどを検出している。以下、主要な遺構について報告する。

溝　1　調査区中央部分で検出した、幅0.5～0.8m、深さ0.2m程度をはかるものである。平面形は残存状況からみて南西から北東方向へゆる

やかな弧状を呈していたことが考えられる。埋土は灰黄褐色極細粒砂に基盤層ブロックを含むものであり、主に北側部分の埋土上半部分から土師器および須恵器等の遺物が出土した（第19図１～４）。

土坑１　調査区北側のほぼ中央部分で検出されたもので、大部分は調査区外へ伸びていく。検出部分における幅は約0.5m、深さは0.2m程度をはかり、途中でＬ字に屈曲する不整形の平面を呈する。埋土は灰黄褐色極細粒砂に基盤層ブロックを含むものであり、埋土上半部分で多数の須恵器が出土している（第19図５～11）。

溝状遺構　調査区西端部で確認され、最大幅1.45m、最深部で約0.8mをはかり、西側は調査区外へのびていくものとみられる。埋土は主に非常にしまりの強い褐灰色シルトで構成される。埋土中の遺物は土師器極細片に限られる。当該溝状遺構は、基盤層との境界が非常に不明瞭であることから、人為的な掘削による所産でなく、倒木痕または樹痕といった可能性が考えられる。



１．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂に褐灰色（10YR6/1）細粒砂を約20％含む。礫（径５㎜以下）、炭化粒を少量含む。

第17図　溝１遺物出土状況図（１：20）

土坑状遺構　調査区東側で確認された、東西幅約2.7m、南北幅2.6m以上、深度は少なくとも0.5mをはかる不整円形の平面を呈するものである。埋土はにぶい黄褐色細～極細粒砂と灰白色極細粒砂の混合土であり、土師器片を少量包含していた。当該土坑状遺構は、検出面においては一部で比較的明瞭な輪郭が確認されたものの、掘削するとその側面がオーバーハングする箇所がみられ、基盤層との境界が不明瞭であることなどから、先述の溝状遺構と同様に倒木痕または樹痕であることが考えられる。

（３）出土遺物

今回図化し得たものは須恵器に限られる（第19図１～12）。第19図１～４は溝１から出土した須恵器である。１～３の杯蓋は、復元口径が14㎝前後と比較的大形である。これらはその形態的特徴から２タイプに分類される。口縁端部ににぶい凹線が巡り、天井部と口縁部の境界には

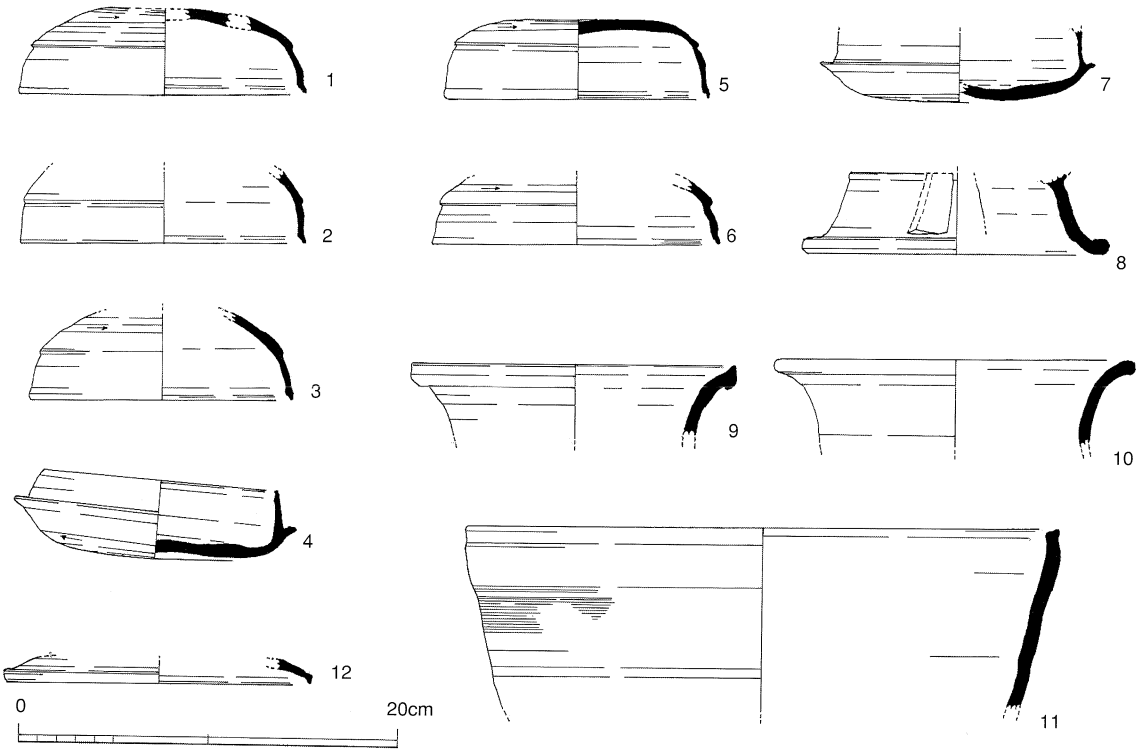
1．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂。炭化物（径～３㎜）を若干含む。

第18図　土坑１遺物出土状況図（１：10）

比較的明瞭な稜線を有するタイプ（第19図１）と、口縁端部に凹線はほとんど認められず、天井部と口縁部の境界がにぶい凹線状であるもの（第19図２・３）に区別される。杯身（第19図４）は口径12.4㎝をはかる。かえりはやや内側に立ち上がっており、口縁端部内面にはにぶい凹線が巡るものである。

第19図５～11は土坑１出土の須恵器である。５・６は杯蓋である。５は天井部と口縁部の境界に明確な稜線を有し、口縁端部内面に比較的明瞭な凹線が巡るなど、全体的にシャープな器形であるものである。一方、６は天井部と口縁部の境界がにぶい凹線で区別される。口縁端部内面にもにぶい凹線が認められ、全体的に丸みを帯びたものである。７の杯身は、口縁部が一旦内側に立ち上がっていく。端部の形態は欠損のため不明である。受け部の先端部分は鋭い稜線を有する。８は復元底部径15.8㎝、残存高4.2㎝をはかる脚部分の破片とみられ、長方形の透かしが三方に施されることが考えられる。８はその形態や大きさからして脚付壷などの脚部分と考えられる。９・10は壷の口縁部である。９の口縁端部は玉縁状の形態を有する。10は９と同様に外反する口縁部であるが先端部が丸く収まる形態である。11は甑とみられる。傾きに疑問を残すものの、復元口径31.0㎝、残存高9.6㎝をはかる。外面は不明瞭であるものの部分的にカキメが確認される。胎土は堅微でなく、浅橙色の色調を呈する。

第19図12はピット１から出土した杯蓋である。口径は復元に疑問が残るものの16.2㎝、残存



第19図　出土遺物（1：4）

高1.4cmをはかる。口縁端部は「く」の字に屈曲する。12は1～11の帰属する時期と異なり、8世紀代の所産と考えられる。

3．まとめ

今回の調査地は撹乱を受けている範囲が広いために遺構の残存状況が極めて悪かったにもかかわらず、限られた調査範囲のなかで一定の成果が得られた。以下、主要な調査成果について報告する。なお、出土遺物からみた遺構の帰属年代は、古墳時代後期前葉（田辺編年ＭＴ－15型式）に収まるものが主体であった。

第11次調査において、幅約80m、深さ0.6～1.0mをはかり、南西～北東に走る浅い谷地形が検出されており、この谷地形より西側の調査区（第11次、19次、22次、50次など）では、弥生時代中期～古墳時代後期にわたる竪穴住居、掘立柱建物などをはじめとする遺構が濃密に分布し、当該時期の新免遺跡における集落の中心域の一角であったことが考えられている。一方、谷地形より東側では古墳時代以降の遺構が希薄であることが確認されており、谷地形よりも東側に位置する今回の調査結果を踏まえる限り、既往の調査成果が追認されることとなった。

次に、溝状遺構、土坑状遺構の性格についてである。当初は何らかの人為的な所産として検討してきたが、基盤層との境界が不明瞭であることや、堆積状況に人為的な影響が明確に認められないことなどから、倒木痕あるいは樹痕の可能性を考えるに至った。これらの帰属する樹

３．まとめ

立年代は、土坑状遺構が８世紀代の須恵器（第19図12）を包含するピット１に切られていることからみて、少なくとも８世紀以前に生えていたものと考えられる。その一方で、新免遺跡は古墳時代後期前後に集落が拡大することが知られており、今回検出された樹痕についても、その一部は当該期の集落拡大に合わせて伐採されたことが可能性として考えられる。

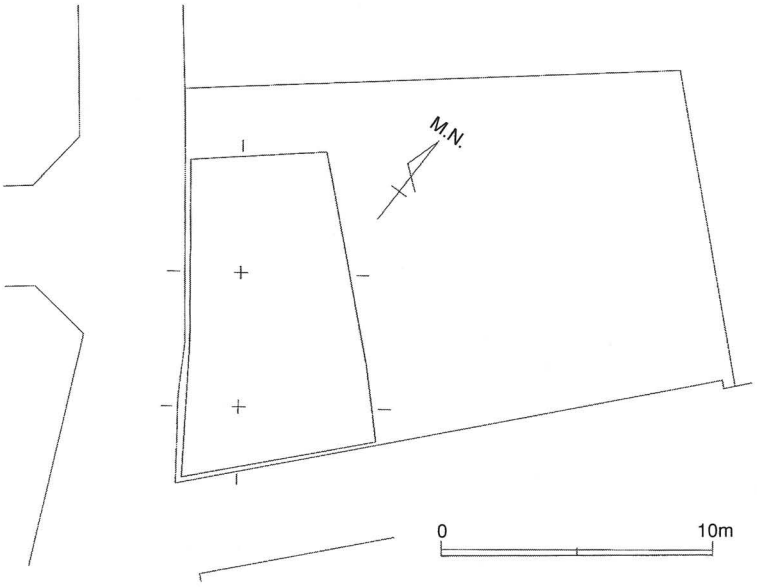
【参考文献】

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団・豊中市教育委員会　『新免遺跡　第11次発掘調査報告書』豊中市文化財調査報告第22集　1987年

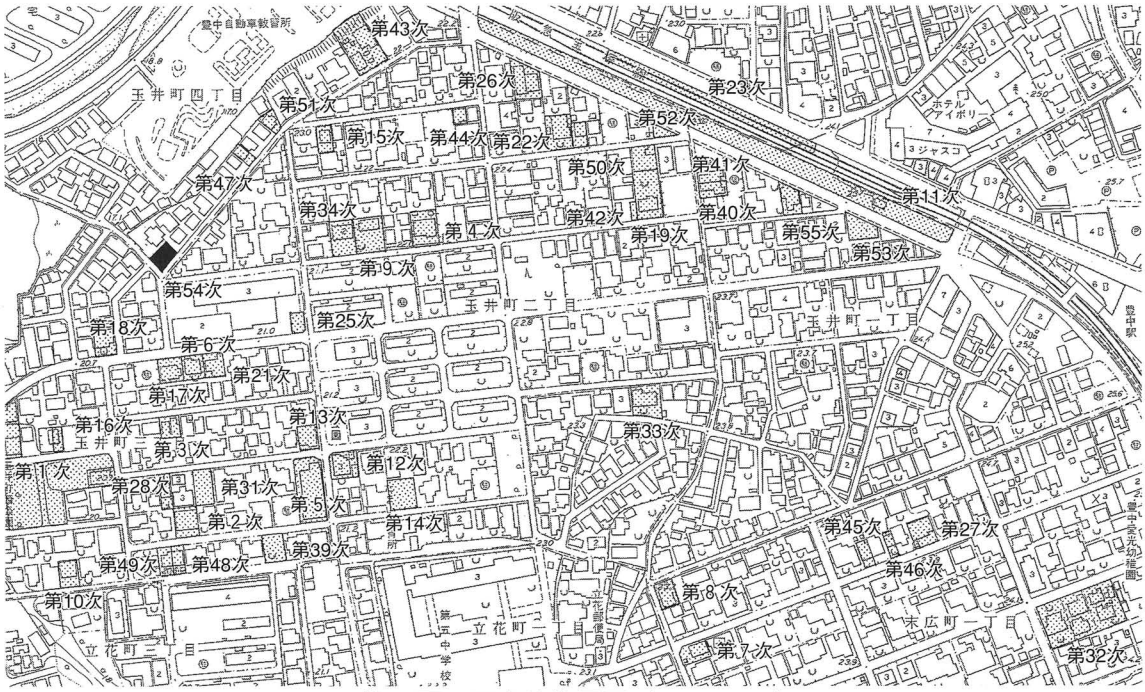
第Ⅴ章　新免遺跡第54次調査

1．調査の経緯

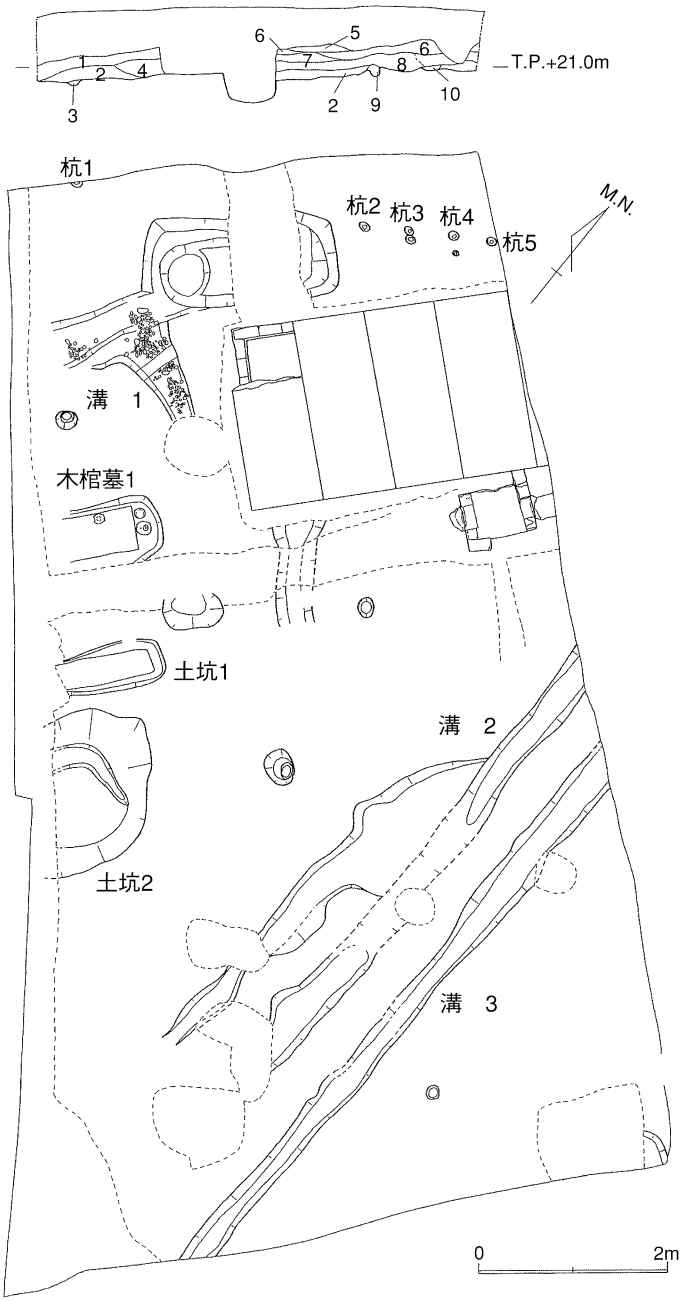
当調査区は豊中市玉井町４丁目21－１に所在する。個人住宅の建設に伴い、平成13年（2001年）12月12日に提出された埋蔵文化財の届け出に基づき、平成13年（2001年）12月13日に確認調査を実施したところ、地表下約40～70cmのところで遺構面を検出した。建物部分の基礎深度は浅く、遺構を損壊する危険はないものの、駐車場部分は切り土を行うため遺構の損壊は避けられないことが判明した。これに伴い協議を行った結果、平成14年（2002年）１月７日から発掘調査を行うことになった。



第20図　調査範囲図



第21図　調査地位置図（１：5,000）



1．褐色（10YR4/4）細粒砂～極細粒砂　1～3㎝大の段丘礫を含む。
2．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂～シルト　1～2㎝大の段丘礫を含む。
3．褐色（10YR4/4）シルト～粗粒砂　疑礫を少量含む。
4．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト～粘土
5．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂
6．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂　1～3㎝大の段丘礫を極少量含む。
7．褐色（10YR4/6）シルト　疑礫を少量含む。
8．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂～シルト
9．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂
10．にぶい黄橙色（10YR6/2）シルト　疑礫を含む。

第22図　調査区平面・断面図（1：80）

2．調査の概要

（1）基本層序

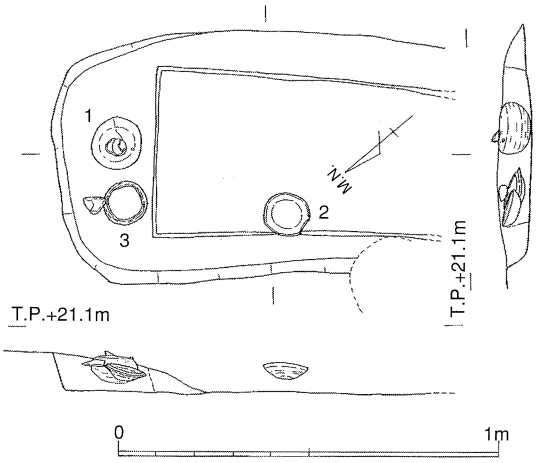
当調査区は、通称豊中台地低位段丘縁辺に位置する。調査区西方には、小規模な浸食谷が北方に流れる千里川へと伸び、また調査区の北側は段丘崖へつらなる緩やかな斜面を形成している。このため、当調査区は北部と西部の眺望に優れた立地ということができる。なお、調査区は北西へ傾斜するなだらかな平坦面となるため、丘陵や河川からの土砂の供給は受けにくく、また中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にある。このような環境もあって、当遺跡においては集落跡などにともなう包含層、さらには遺構上面に及ぶ削平を受ける場合が少なくない。当調査区においてもその例にもれず、大半の遺構は表土直下の段丘堆積層上面で検出したが、段丘崖へ傾斜する調査区北部では若干の遺物包含層を確認した。

（2）検出した遺構

調査区からは、杭列を含む若干の柱穴と溝、土坑、木棺墓およびその可能性が考えられる土坑1基を検出した。以下、主要

な遺構について、概要を述べることにする。

木棺墓１　調査区西部中央で検出した。木棺墓の西側は擁壁および側溝の掘削に伴い、破壊されており主軸長は明確ではないが、残存する主軸長は1.0m、幅0.65m、深さ0.1mをはかる。棺の痕跡および墓壙内の埋土差から木棺墓となる可能性が高い。棺の痕跡などから復元される木棺の主軸長は0.75m以上、幅0.4mをはかる。また、木棺墓の主軸方向はN－50°－Eとなる。なお、木棺裏込めは均質な暗褐色極細粒砂が堆積し、棺内に堆積した流入土との相違は比較的明確であった。



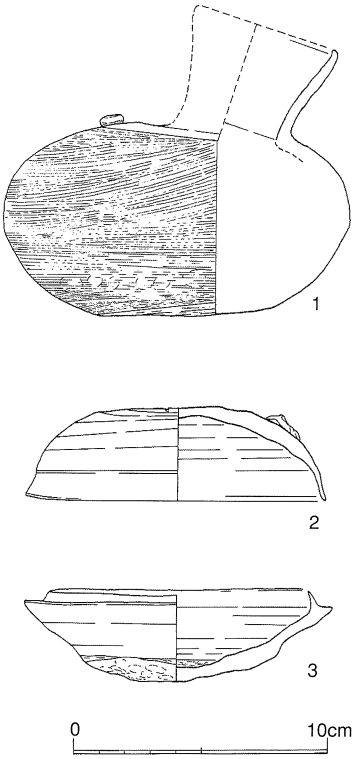
第23図　木棺墓１平面・立面図（１：20）

棺の小口外側には、須恵器横瓶（１）と杯身（３）が正位の状態で並べて置かれていた。また、墓壙中位において須恵器坏蓋（２）が棺蓋上から転落したような状態で出土した。一方、棺内から遺物の出土はなかった。

第24図に棺外小口部から出土した須恵器横瓶（１）、杯身（３）杯蓋（２）を掲載した。

１の横瓶は、器高10.5㎝、体部の最大径13.6㎝をはかる。頸部は部分的に残存するだけで、口径は明確ではない。把手はすでに形骸化し、浮文となる。体部外面にはカキメを、また底部外面に回転ヘラケズリが施されている。なお、体部内面は計測できなかったため、断面は図化できなかった。

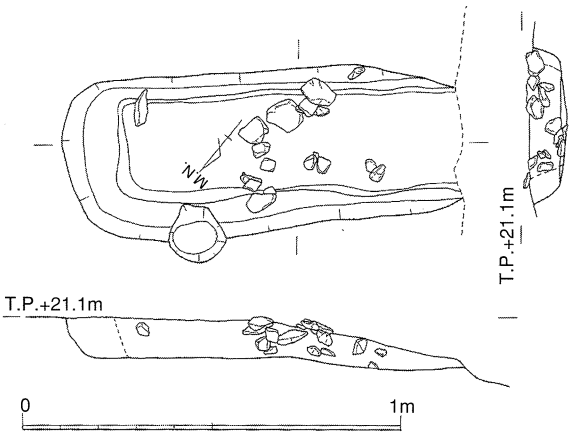
３の杯身は、器高3.6㎝、受部径10.2㎝をはかる。体部外面のほぼ全面にナデ調整を施し、底部との境界付近に一部ヘラケズリがみられる。ヘラケズリは、ナデを施したあとに余分な粘土を削り落とすために行ったものと考えられるため、通有の回転ヘラとは異なるものと考えられる。底部は回転ヘラ切りを行ったあと、一部に押圧を加えるがほとんど無調整に近く、わら敷きの痕跡が認められる。



第24図　木棺墓１出土遺物（１：３）

３はこの時期の杯身としては著しく異質な特徴を有しており、他の地域からの搬入品となる可能性も否定できない。

２は、口径11.8㎝、器高3.7㎝をはかる。口縁部はナデ調整を、天井部は回転ヘラ切りを行ったあと回転ヘラケズリを施す。また、天井部内面には押圧痕が残る。　胎土が緻密で、焼成も比較的良好である。



第25図　土坑１平面・立面図（１：20）

１・２からは時期の詳細は明確にしがたい部分が残るが、３がＴＫ－217並行となることから、木棺墓は７世紀前半の所産と言える。

土坑１　木棺墓の南0.8ｍにて検出した、平面隅丸長方形を呈する土坑である。土坑の西端は、木棺墓と同様に破壊されているため、主軸長は明確ではないが検出部分で1.05ｍをはかることから、おおよそ1.15ｍ前後となる可能性が高い。また、土坑の幅は0.45ｍ、深さ0.1ｍをはかり、掘削深度は木棺墓のそれと大きくかわることがない。土坑１の主軸方向はＮ－45°－Ｅである。

土坑１内において、土層断面では木棺の痕跡は明確に確認できなかったが、平面においては木棺周囲の裏込めと土坑堆積土に差異がみられることから、木棺を使用した可能性が考えられる。木棺の規模については、十分明確にはしがたいが、主軸長は1.6ｍ、幅0.27ｍをはかるものと考えられる。

なお、土坑１には遺物の埋納はなかったが、土坑上層から段丘礫とともに、土師器長胴甕の破片が出土している。

土坑２　調査区西部で検出した直径1.6ｍ、深さ0.27ｍをはかる円形の土坑である。埋土が埋め戻し土の１層のみで、自然堆積土はみられない。土坑底の周囲には、幅20㎝ほどの弧状の掘り込みがみられるとともに、底面直下に段丘礫層の堆積が確認できることから、土坑は当初灌漑用の井戸を作る目的で掘削されたが、その途中で段丘礫層に直面し、埋め戻されたものと考えられる。

土坑２は、埋土および遺構の性格から、近世以降の所産となる可能性が考えられる。

溝　１　調査区北西隅で検出した幅0.5ｍ、深さ0.1ｍをはかる。溝の埋土は上下２層に区分できる。このうち、下層は１～２㎝大の段丘礫が多く堆積している状況が観察でき、一見して何らかの目的をもって埋められたようにも考えられたが、分布・堆積状況から自然堆積による所産となるものと判断した。

溝埋土からは、実測はできなかったものの、須恵器片が若干出土していることから、古墳時代後期の所産となるものと考えられる。

溝２・３　調査区南部で、検出した南北方向に伸びる溝である。溝２は幅0.3ｍ、深さ0.1ｍ、溝３は幅0.3ｍ、深さ0.15ｍをはかる。溝２・３は、どちらも明黄灰色中～細粒砂が堆積する。

溝２・３は並行して掘削されているが、上面の削平が著しく堆積状況から時期差などを明確にできないため、併存したものか、時期的に前後するものなのかは不明である。

なお、溝２・３は、埋土の様相から近世水田に伴う水路と考えられる。

杭　列　調査区北端部で検出した、全長4.5m以上となる杭列である。杭列は略東西方向に並ぶが、その北側は段丘崖につづく斜面となっていることから、地形界を区切るような目的で設置されたものと考えられる。杭間の距離は0.4～0.5m前後をはかり、杭１と２の間隔だけが大きく開く。杭痕は直径10cm前後をはかり、それぞれの杭痕の深さは、５～10cmとばらつきがある。杭痕の埋土は暗褐色極細粒砂からなり、その埋土の様相から古墳時代後期以前となる可能性が高い。

３．まとめ

今回の調査では、７世紀前半の木棺墓、および木棺墓の可能性が考えられる土坑のほか、古墳時代後期頃の柱穴、溝、杭列、近世水田関連遺構を確認した。

このなかで特に注目されるのが、７世紀の木棺墓である。７世紀の木棺墓は他に蛍池北遺跡で１例確認されているだけで、新免遺跡でははじめての事例となる。

ところで、蛍池北遺跡の木棺墓の場合、木棺墓が古墳時代中期の小円墳の造営にはじまる墓地の延長に作られた可能性が考えられるが、新免遺跡の場合、周辺にこのような古墳や墳墓はみられず、今のところ木棺墓が墓地の一角に作られた可能性は乏しいと言える。また蛍池北遺跡の場合、開析谷の対岸に位置する蛍池遺跡および蛍池東遺跡において同時期の集落が展開しており、その集落に伴う可能性が想定できるが、新免遺跡の場合は桜井谷窯跡群における須恵器生産の縮小に伴い７世紀前半には集落の展開がみられなくなることから、被葬者の帰属する集落は明確ではない。

このように、今回確認した木棺墓については、墓地の一角に作られた可能性が低く、また被葬者の実態についても、現段階は明確ではないため、その位置付けについては、今後の課題としておきたい。

以上、今回の調査では、これまで新免遺跡では知られていなかった７世紀前半の木棺墓が確認されるなど、多くの成果を得ることができた。しかし、木棺墓の性格やその位置付けについては多くの課題を残しており、周辺における調査成果の蓄積を待つ必要がある。

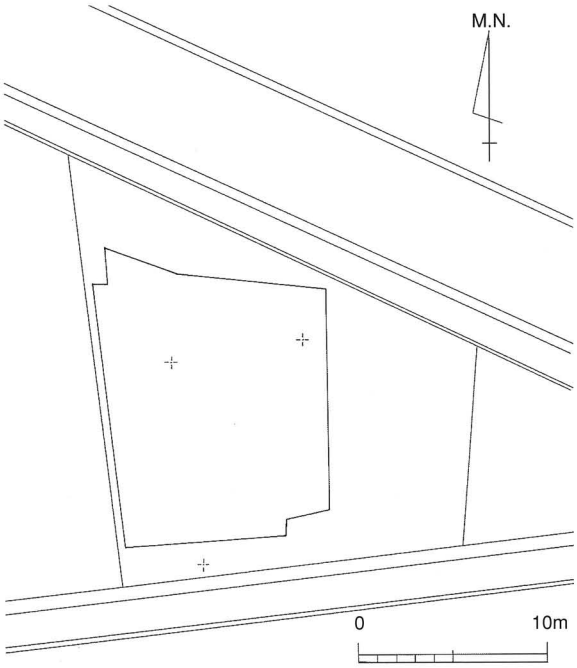
なお、当調査区では南方および東方にむけて遺構面が高くなり、また遺構密度も増す傾向が看取された。よって、今後とも周辺における開発等においては、これら埋蔵文化財の存在に留意し、慎重を期す必要があることを提言しておきたい。

第Ⅵ章　新免遺跡第55次調査

1．調査の経緯

調査地は豊中市玉井町２丁目255、256に所在する。平成14年２月６日に提出された埋蔵文化財発掘の届け出に基づいて確認調査を実施したところ、地表下約30㎝で遺構を確認した。申請地では住宅兼診療所の建設が予定されており、建物にともなう基礎掘削が遺構の損壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本格的な発掘調査を実施することとなった。

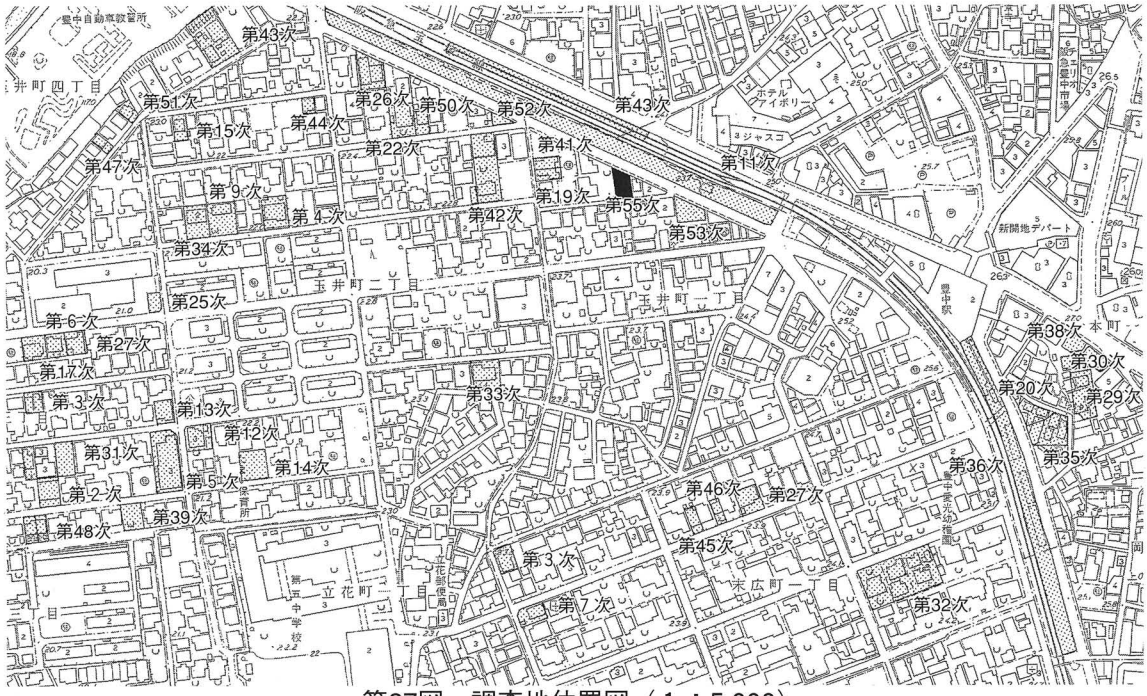
なお、調査面積は160㎡、調査期間は平成14年３月１日から平成14年３月28日の約１か月であった。



第26図　調査範囲図（１：400）

2．調査の概要

（1）基本層序



第27図　調査地位置図（１：5,000）

2．調査の概要

1．現代の盛土および撹乱土。　2．旧耕作土。　3．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂。礫（径～1㎝）を少量含む。中世以降の耕作土。
4．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂と明黄褐色（10YR6/6）極細粒砂の混合土（約1：1）。弥生時代～古墳時代の遺物包含層。
5．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂と褐黄褐色（10YR4/2）シルトの混合土（2：3程度）。基盤層ブロック（径～1㎝）を若干含む。　6．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂（～シルト）。
7．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂と灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂の混合土（1：1）。基盤層ブロック（径～1㎝）を若干含む。
8．灰黄褐色（10YR5/2）と褐灰色（10YR6/2）極細粒砂の混合土（約2：3）。　9．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂。基盤層ブロック（径～3㎝）を微量含む。
10．褐色（7.5YR4/3）シルトと褐灰色（10YR4/1）極細粒砂の混合土（約1：1）。基盤層ブロック（径～2㎝）を多数含む。
11．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂と褐色（10YR4/3）極細粒砂の混合土（約1：1）。　12．にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト。基盤層ブロック（径～1㎝）を微量含む。
13．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂（～シルト）。基盤層ブロック（径～2㎝）を若干含む。　14．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトと褐灰色（10YR5/1）極細粒砂の混合土（約1：1）。
15．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂。　16．灰黄褐色(10YR4/2)シルト(～極細粒砂)。　17．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂（～シルト）
18．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂。基盤層ブロック（径～1㎝）を微量含む。
19．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂とにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトの混合土（2：1）。基盤層ブロック（径～1㎝）を微量含む。土坑1埋土　20．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂。炭化粒を若干含む。
21．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂と灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂の混合土（1：1）。土坑2埋土。　22．褐色（7.5YR4/3）シルト。　23．灰白色（2.5Y8/1）シルト（～極細粒砂）。当調査区の基盤層。

第28図　調査区平面・断面図（1：100）

今回の調査地における基本層序は、１層：現代の盛土および撹乱土、２層：旧耕作土、３層：褐灰色極細粒砂、４層：にぶい黄褐色極細粒砂（～シルト）、５層：灰白色シルトの順に堆積する。３層は瓦器椀、土師器極細片を包含する中世以降の耕作土とみられる。４層は弥生土器、土師器、須恵器を包含する遺物包含層である。５層は当調査地の基盤層に相当する。

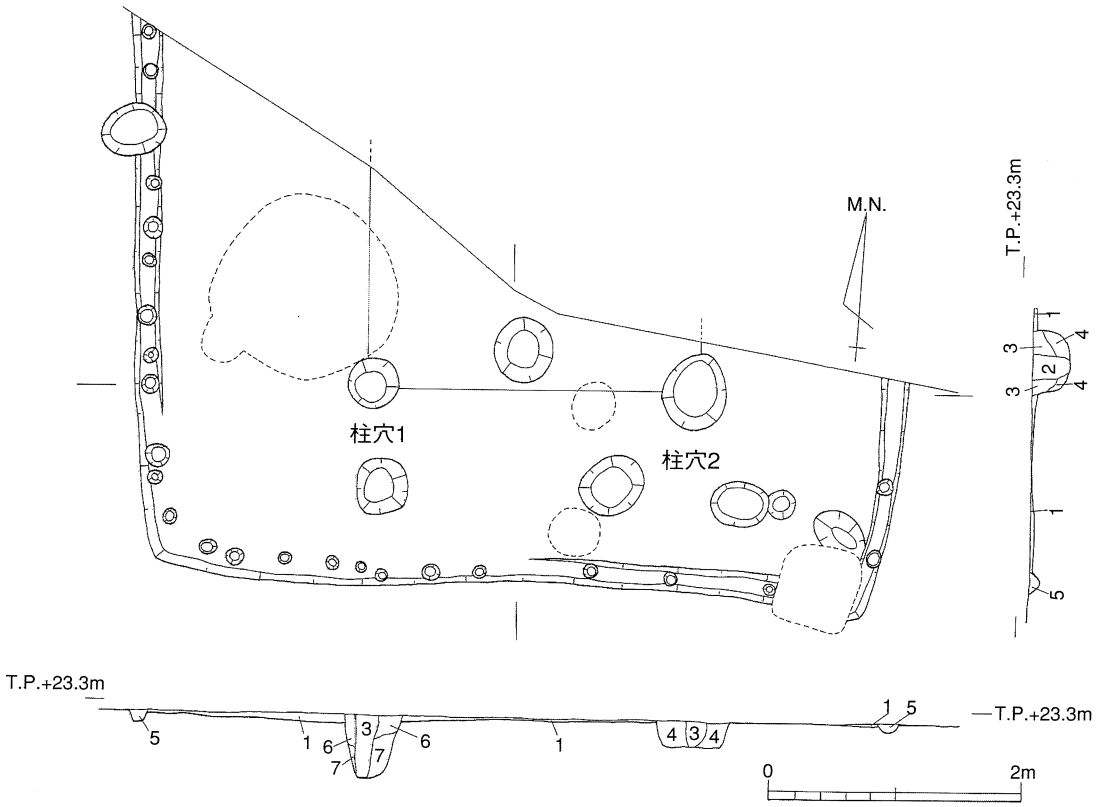
今回は、５層上面において遺構を検出し調査を実施した。

（２）検出した遺構

今回の調査地は、南側が大きく削平を受けていたため、実際は「コ」字形の調査区を呈する。調査地内では、竪穴住居１基、掘立柱建物１棟をはじめ、溝、土坑、大小多数の柱穴等を検出した。以下、主要な遺構・遺物について報告を行なう。

竪穴住居　調査区北端で、方形の竪穴住居の一部を検出した。東西辺5.6m、南北辺４m以上をはかり、周囲には幅0.15m前後の壁溝が巡る。主柱穴は柱穴１・２とみられ、その配置からみて四本主柱であったことが考えられる。柱芯間の距離は2.6mをはかる。

壁溝基底部に沿って直径約８㎝前後、深さ５～10㎝程度の小穴列が確認された。これらは、



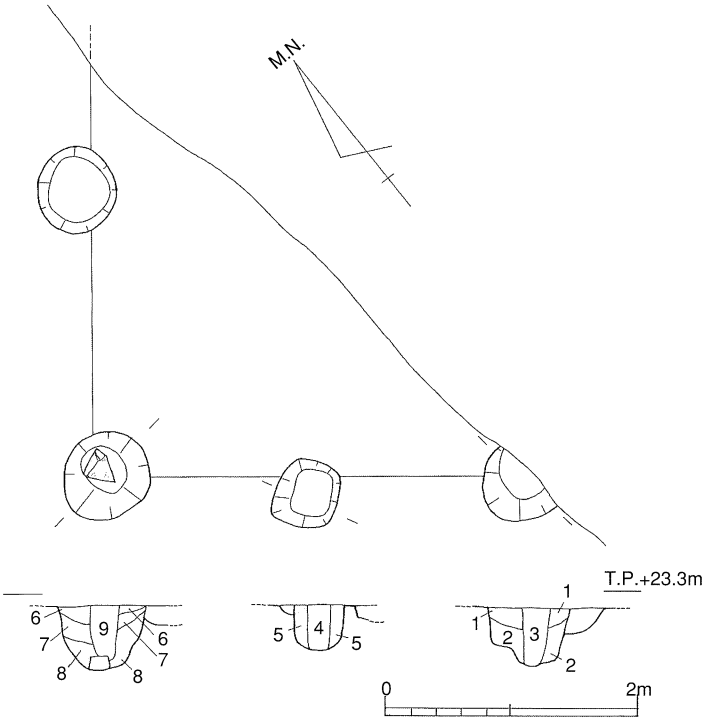
1．灰黄褐色（10YR4/1）極細粒砂（～シルト）。基盤層ブロック（径～２㎝）を約20％含む。貼床土。
2．暗褐色（10YR3/3）極細粒砂（～シルト）。基盤層ブロック（径～２㎝）、および礫（径～１㎝）を若干含む。
3．灰黄褐色（10YR4/2）シルト。基盤層ブロック（径～２㎝）を微量含む。　4．灰黄褐色（10YR4/2９極細粒砂。基盤層ブロック（径～２㎝）を若干含む。
5．灰黄褐色（10YR4/2）シルト（～極細粒砂）。基盤層ブロック（径～１㎝）、および炭化粒（径～１㎝程度）をそれぞれ若干含む。
6．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂（～シルト）。基盤層ブロックを約30％混入。礫（３㎜程度）を微量含む。
7．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂（～シルト）。基盤層ブロック（径～２㎝）を約30％含む。

第29図　竪穴住居平面・断面図（１：60）

主柱穴が主に上屋を支えるための柱穴であったのに対し、この小穴列は壁材を補強するため、あるいは屋根軒先を支える目的で打ち込まれた、いわゆる「壁支柱・壁柱」である可能性が考えられる（宮本　1989）。以上の所見から、当住居は壁立式竪穴住居の形式であったことが考えられる。

住居内では、灰黄褐色極細粒砂（～シルト）に基盤層ブロックを多数含んだ貼床土（第29図１層）が検出されている。住居内において、焼土、あるいは炭化物が集中する箇所はみとめられなかった。住居内から出土した須恵器片は、細片のため図化し得なかったもののＭＴ－15型式の特徴を有しており、住居は６世紀前葉頃に機能していたことが考えられる。

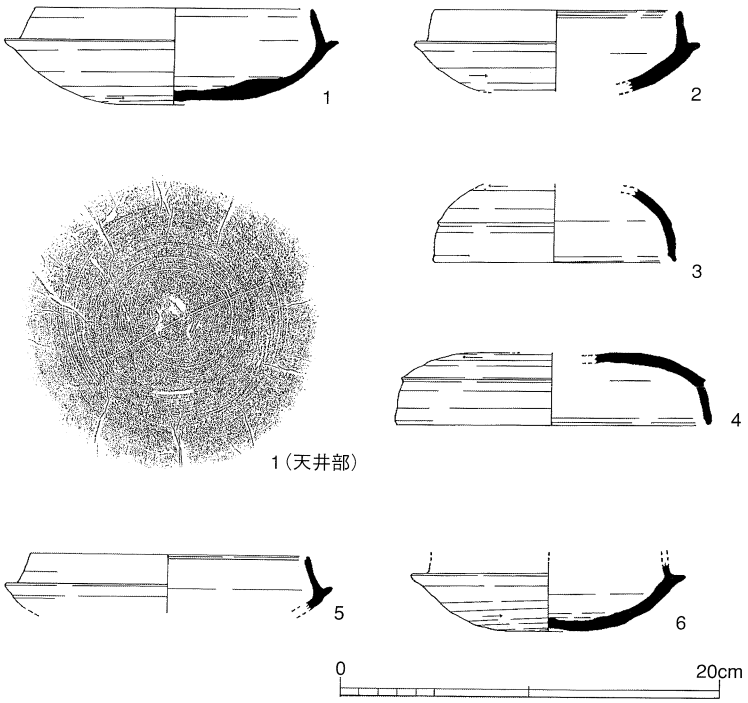
掘立柱建物　調査区南東側において検出した（第30図）。ただし、大部分が調査区外にのびているためその詳細は不明であるが、少なくとも桁行・梁間ともに２間以上を有する建物とみられる。検出面における各柱穴の直径は0.56～0.8m、深度は0.4～0.5mを有する。各柱芯同士の間隔は北西－南東方向で約1.5m、北東－南西方向で2.3mである。なお、南西隅の柱穴では基底部付近において根石が検出された。各柱穴の埋土中からは細片のため図化し得なかったが土師器、須恵器片が出土していることから、当該建物は古墳時代後期以降の所産である可能性が考えられる。



1．にぶい黄橙色（10YR7/2）極細粒砂。基盤層ブロック（径～３㎝）を若干含む。
2．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂。基盤層ブロック（径～５㎝）を多く含む。
3．灰黄褐色（10YR5/3）極細粒砂～シルト。基盤層ブロック（径～２㎝）を微量含む。
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト～極細粒砂。基盤層ブロックを（径～２㎝）を微量含む。
5．にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。基盤層ブロック（径～３㎝）を若干含む。
6．黒褐色（10YR3/2）シルト～極細粒砂。基盤層ブロック（径～５㎝）を多く含む。
7．暗褐色（10YR3/3）シルト～極細粒砂。基盤層ブロック（径～２㎝）を微量含む。
8．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂～シルト。基盤層ブロック（径～３㎝）を若干含む。
9．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。基盤層ブロック（径～２㎝）を微量含む。

第30図　掘立柱建物平面・断面図（１：60）

柱穴列１　調査区北西側で３基の柱穴が並んで検出された。南西～北東方向の主軸を有し、３基は約2.2mの柱芯間距離で並ぶ。本来は建物の一部であった可能性が考えられるが、今回の調査区内において柱穴列１とほぼ同様の規格を有する柱穴列が確認されなかったため柱穴列として扱った。各柱穴の直径は0.6～0.7m、深度は0.3～0.4mを有する。埋土はにぶい黄褐色シルトに基盤層ブロックを多数含むものである。須恵器片を包含することから柱穴列１は



第31図　出土遺物（1：4）

古墳時代後期、またはそれ以降に機能していたものと考えられる。

溝　1　調査区南東端付近で検出した、東西方向に伸びる溝である。部分的な検出にとどまっているため詳細な規模は不明であるが、検出面における幅は0.4～0.6m、深さは0.1～0.15mをはかり、さらに南東方向へと伸びていくものと考えられる。埋土は黒褐色シルト（～細粒砂）の単一層であり、基盤層ブロックを若干含む。少量であるが土師器、須恵器片を包含することから溝1は古墳時代後期の所産とみられる。

土坑1　調査区南東端部付近で検出した。大部分は調査区外になるため、詳細な規模は不明であるが、少なくとも南北約2m、東西0.6m以上、深度は0.1m程度であることが考えられる。埋土中から出土の須恵器（第31図5・6）から、土坑1は古墳時代後期に機能していたことが考えられる。

土坑2　調査区南壁中央部分の断面上でのみ確認できたものであり（第28図21層）、平面形態は不明であるものの調査区からさらに南側に伸びていくことは確実である。断面部分での東西幅は1.7m、深度は0.2m程度を有する。基底面が平坦であることから竪穴住居の可能性も考えられたが、断面上において壁溝や柱穴等がみられないことから土坑として扱った。

（3）出土遺物

調査では弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器などの遺物が出土しているが、大半は細片であるため、図化し得たものは須恵器6点に限られる。1は土坑2出土の杯身であり、口径14.4

cm、器高4.8cmをはかる。口縁端部内面にはにぶい凹線が巡る。底部外面には鋭利な工具によって「－」と刻まれており、ヘラ記号の一種とみられる。２、３はそれぞれピット１、２からの出土である。２の杯身は復元口径13.0cmをはかり、端部内面には比較的明瞭な凹線がみとめられる。３の杯蓋は復元口径12.6cm、残存高3.8cmをはかり、口縁端部内面に比較的明瞭な凹線が巡る。他の須恵器とは若干色調が異なり青灰色を呈する。４の杯蓋は復元口径15.8cm、残存高1.9cmに達するものである。比較的平坦な天井部を有し、口縁端部内面には凹線が巡る。５・６はいずれも土坑１出土の杯身である。５は小片のため口径の復元には疑問を残すものの14.4cmをはかり、端部内面にはにぶい凹線が巡る。１～６は田辺編年のＭＴ－15型式～ＴＫ－10型式に収まるものであり、須恵器を包含する遺構の多くは当該時期に収まることが考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、多数の柱穴とともに土坑、溝、竪穴住居、掘立柱建物、柱穴列などの遺構が確認された。これらの遺構は大半で須恵器が出土していることから、その多くが古墳時代後期に帰属することが考えられる。この他、黒色土器が出土した柱穴も少数ながら検出されており、平安中期頃の集落も所在したことが考えられる。

今回は、調査面積の制約などもあり、検出遺構の配置や竪穴住居の詳細な検討には至らなかった。しかしながら、千里川上流域に展開した桜井谷窯跡群の最盛期に相当する古墳時代後期の遺構が検出されたことは、隣接する本町遺跡とともに、桜井谷の須恵器生産・流通体制を検討する上で有益な資料が得られたものと考える。

【参考文献】

宮本長二郎　1989　「さまざまな家」　『古代史復元２－縄文人の生活と文化－』　講談社

第Ⅶ章　曽根遺跡第７次調査

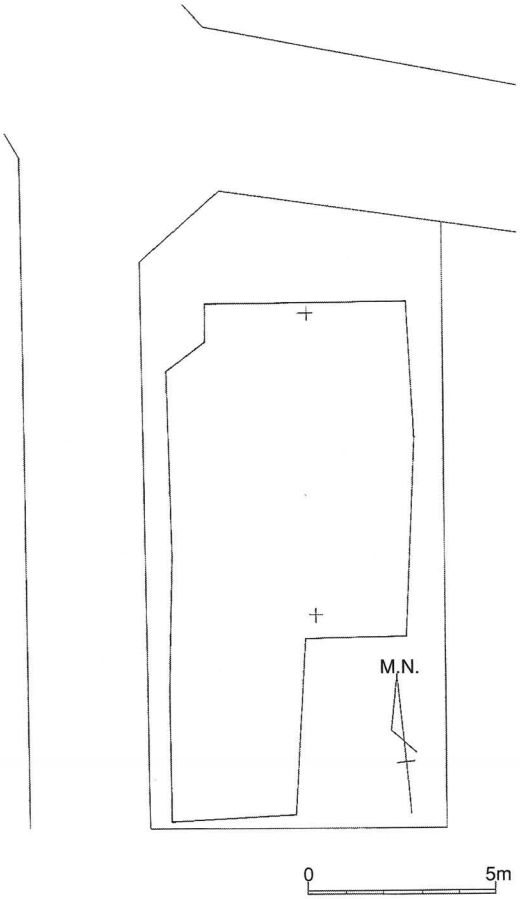
１．調査の経緯

当調査区は豊中市曽根西町４丁目28－１に所在する。個人住宅の建設に伴い、平成13年（2001年）11月30日に提出された埋蔵文化財の届け出に基づき、平成14年（2002年）１月15日に確認調査を実施したところ、地表下約30cmのところで遺構面を検出した。予定されている建物の基礎深度の場合、遺構の損壊は避けられないことが判明した。これに伴い協議を行った結果、平成14年（2002年）１月29日から発掘調査を行うことになった。

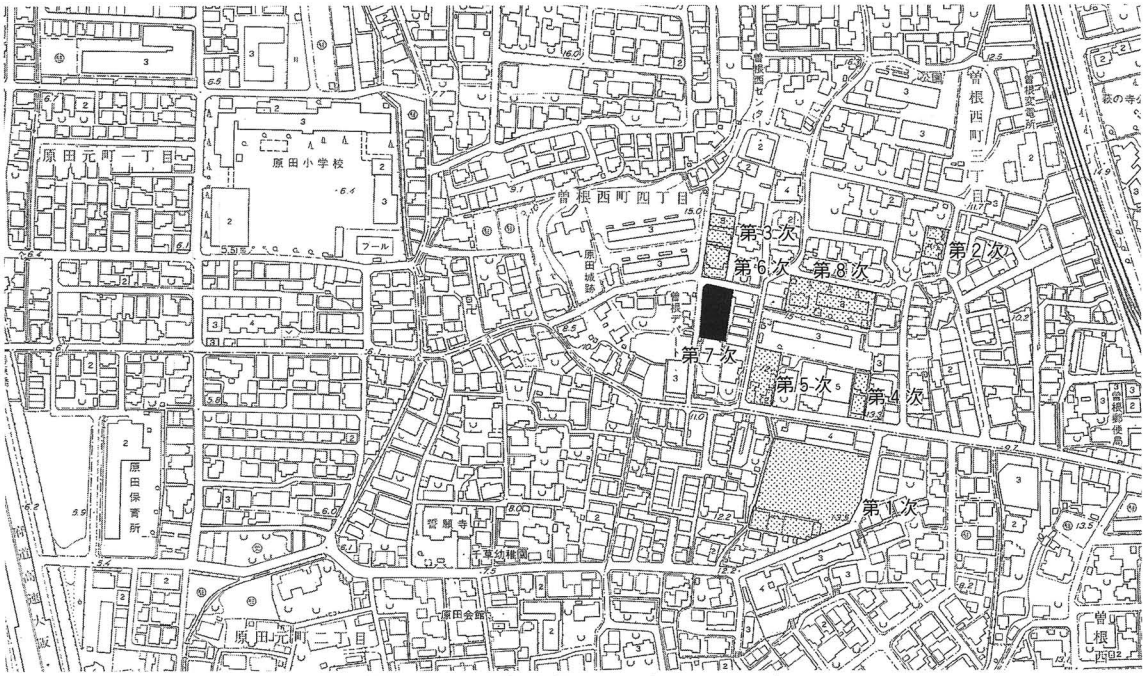
２．調査の概要

（１）基本層序

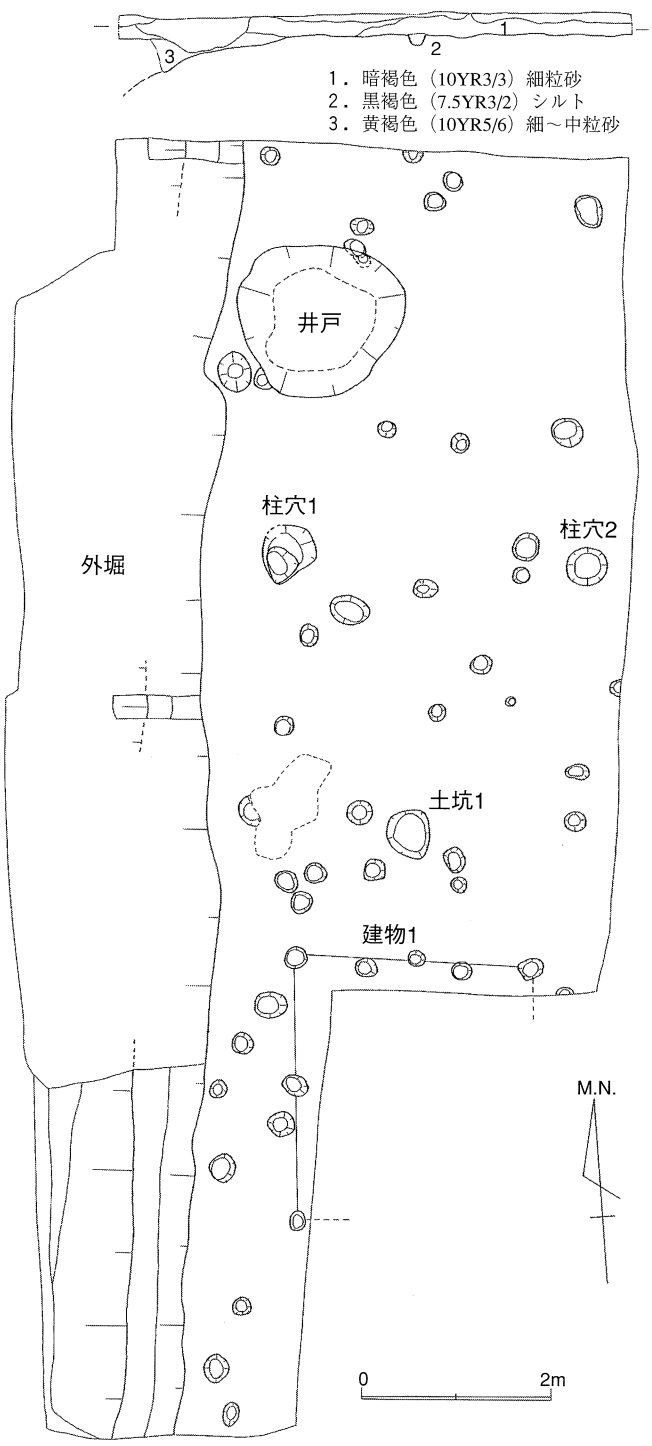
当調査区は、通称豊中台地低位段丘南西端に位置する。調査区南方には、浸食作用によって解析谷状に形成された起伏に富む段丘崖があり、調査区はその段丘崖へ傾斜するなだらかな平坦面となる。このため、一帯は河川からの土砂の供給は受



第32図　調査範囲図（１：200）



第33図　調査地位置図（１：5,000）



第34図　調査区平面・断面図（1：80）

けにくく、また中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にあったと考えられる。このような環境による影響もあり、既設建物解体時に著しい削平を受け、すべての遺構は表土直下の段丘堆積層上面で検出した。

（2）検出した遺構

調査区からは、当初予想されたように、原田城北城の外堀、および弥生時代終末期の建物、土坑、平安時代中期の柱穴などを検出した。以下、主要な遺構について、概要を述べることにする。

建物1　調査区南部で検出した柱間2間×2間（南北2.8m、東西2.5m）の掘立柱建物である。建物の主軸は略北を向く。柱穴の残存状況は、著しく悪いため、使用した柱の直径は明確にできないが、太くても15cm程度のものとなる可能性が高い。

柱穴の掘削深度をみると、四隅の柱がやや深く掘削されている様相が観察でき、建物が簡易な高床の倉庫となる可能性も想定できる。

建物の柱穴からは、少量ながら弥生土器の細片が出土しており、弥生時代終末期前後の所産となる可能性が考えられる。

土坑1　調査区中央で検出した。直径0.5m、深さ0.15mをはかる平面不整円形を呈する土坑である。埋土は2層に区分したが、特徴に大きな差異はみられなかった。土坑南側から、弥生土器甕の体部片が出土した。

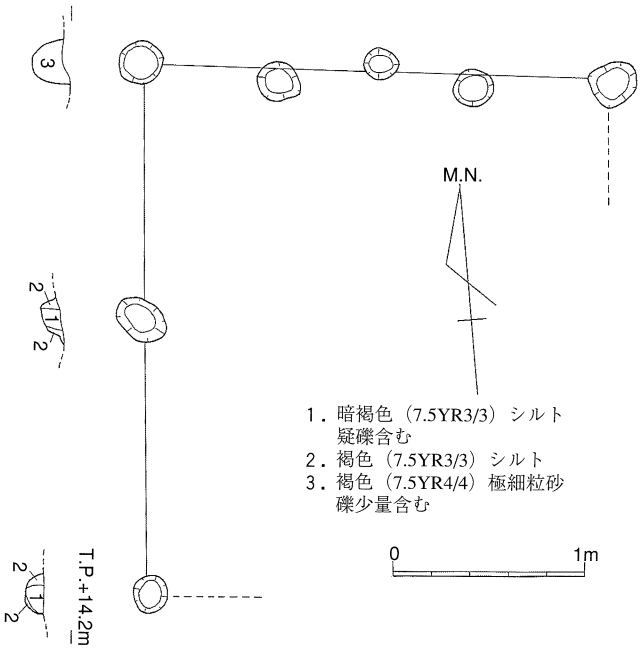
出土した甕は風化が著しく図化できなかったが、体部外面にタタキを施した小型の甕となる。

柱穴１・２　調査区中央付近で検出した柱穴である。それぞれの直径は柱穴１が0.55m、柱穴２は0.45mをはかる。柱穴から黒色土器、須恵器の細片が出土したことから、平安時代中期の柱穴となる可能性が高い。

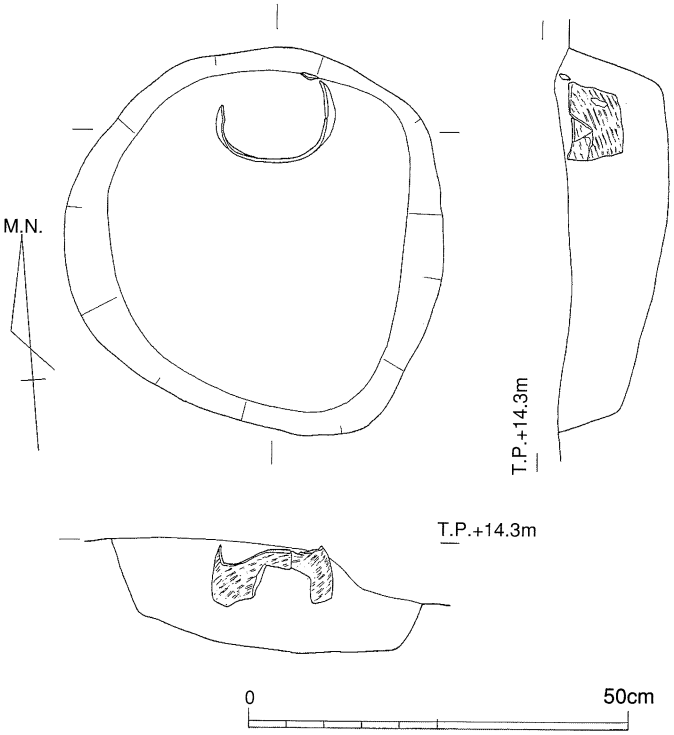
柱穴１・２のほかにこの時期の明確な柱穴はみられないが、柱穴１・２を一棟の建物の梁行きに想定した場合、建物の主軸方向は第６次調査検出の建物１とほぼ同じ方向となる。

外　堀　調査区西端で検出した、原田城北城の外堀である。堀の東岸を検出しただけにとどまるため、全容は明確ではないが、幅は少なくとも２m以上となる。掘削部分では、深さ1.4mのところで、基底面を確認した。埋土は、検出面から自然堆積層、第２次整地層、耕土層、第１次整地層、自然堆積層の順で堆積している。これら堆積土の変化から、外堀が掘削されてから埋没するまで、その周囲の環境が著しく変化したことが推定できる。

なお、外堀の最下層（第13層）上面から、第38図の瀬戸美濃焼小皿（大窯４－ｂ期）が出土した。よって、外堀は16世紀末まで開口し、以後耕地などに利用されながら段階的に埋没していったものと考えられる。



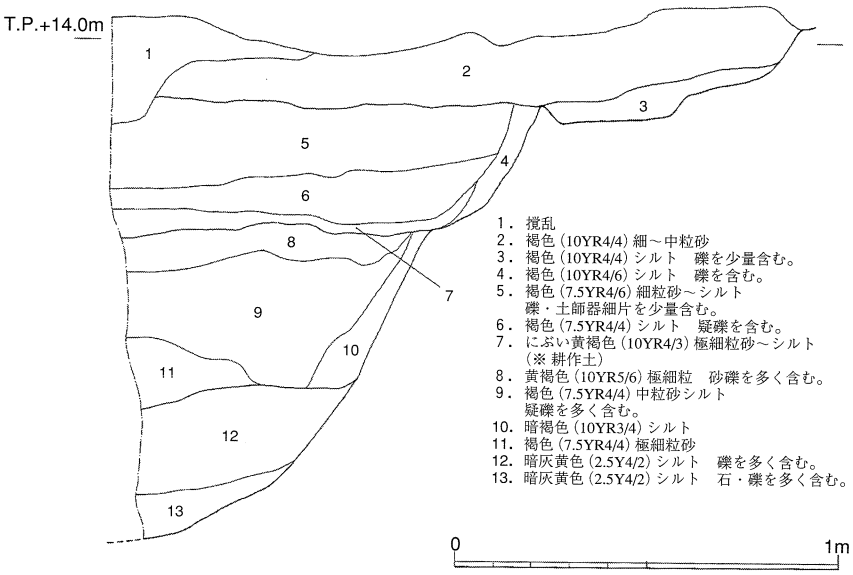
第35図　建物１平面・断面図（１：40）



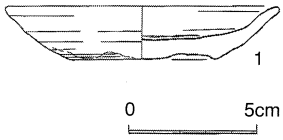
第36図　土坑１平面・立面図（１：10）

第38図は、瀬戸美濃焼小皿である。口径10.6cm、器高2.6cmをはかる。体部内外面に釉がかかるが、見込みおよび畳付けは露胎する。底部外面には重ね焼きの際に付着した環状のトチンを打ち欠いた痕跡が明瞭に残る。

ところで、外堀は敷地西側の道路と並行し、またその大部分が道路下にあることが、今回の調



第37図　外堀断面図（１：20）



第38図　外堀出土遺物
（１：３）

査区の状況から確認できた。このことは、明治六年製『原田村絵図』における字「コネジ」地区が外堀と一致することを示す。また、これまで当調査区周辺で行われてきた確認調査などで推定されてきた縄張りについて、調査区北西の交差点部分で屈曲し、また外堀がさらに南へ伸びることが判明した点は、大きな成果となった。

３．まとめ

今回の調査では、多数の柱穴などとともに弥生時代終末期前後の掘立柱建物１棟、それに原田城北城外堀の一部が確認された。

このうち、今回検出した原田城北城の外堀については、北城の縄張りをより明確にする上で大きな成果となった。また、今回も弥生時代終末期にかけての遺構が多数検出され、その集落の広がりが丘陵緩斜面近くまで及ぶことが明確になるとともに、第６次調査で検出されている平安時代中期の掘立柱建物と同時期の可能性が高い柱穴１・２を確認したことで、第１・５・８次調査区一帯に存在する大型建物群に関連する施設が、散漫ながらも丘陵南側斜面まで広がることが予想できることとなった。

このように、今回の調査では曽根遺跡の変遷、また原田城北城の様相を考える上で、重要な成果を得ることができた。なお、当調査区周辺は、すでに第３次・第６次調査区の成果からも知られるとおり、濃密な遺構の分布状況が予想されるところであり、建築工事等においてはこれら埋蔵文化財の存在に特に注意する必要があることを提言しておきたい。

第Ⅷ章　確認調査の成果

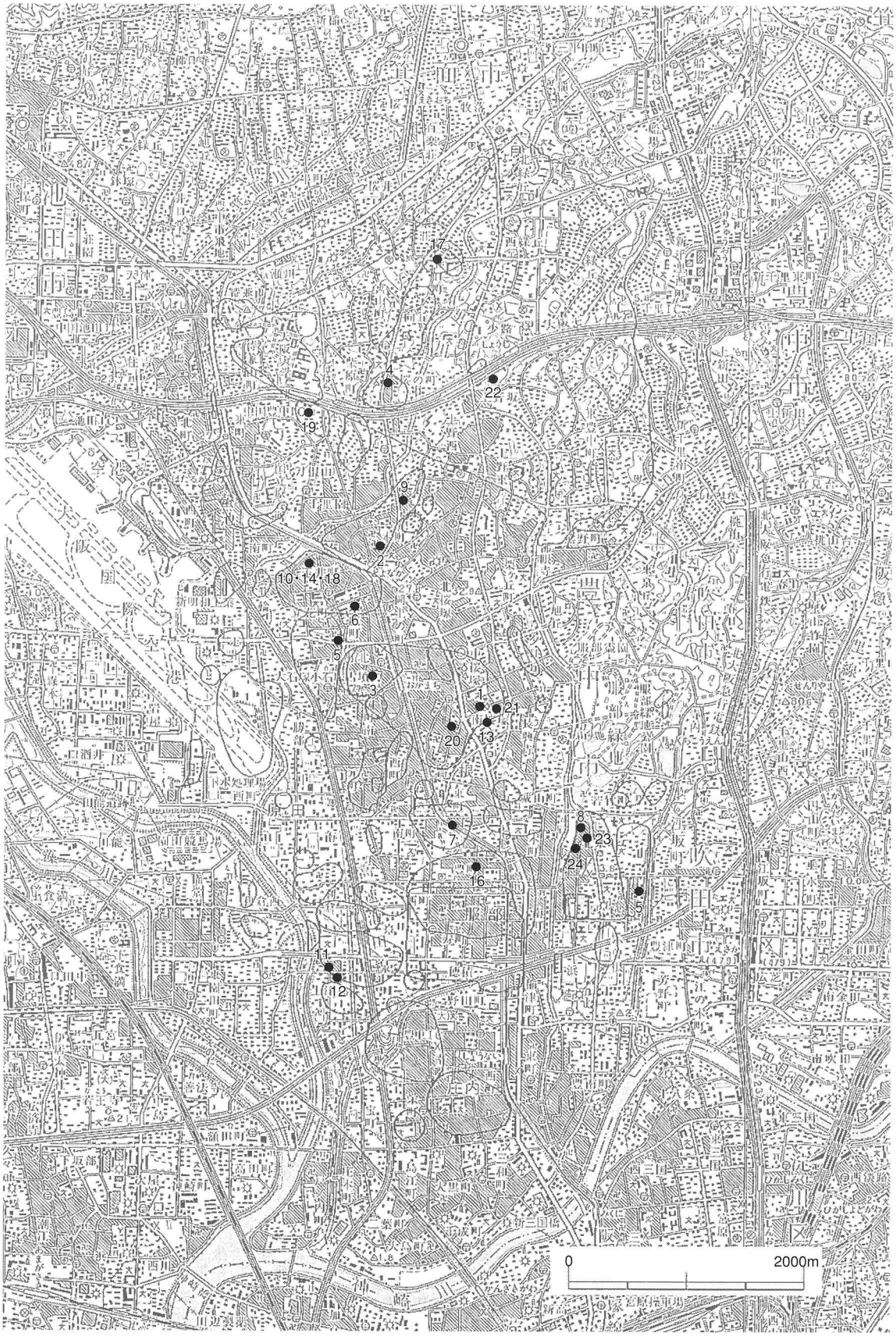
確認調査の概要

昨年度１月～３月および今年度４月～12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、24件を数え、昨年度７件、今年度17件という内訳である。このうち、１件の調査で明確な遺構が確認されたが、建物の基礎掘削深度が遺構検出面に及ばなかったことなどから、本格的な発掘調査には至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第39図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。なお、第39図中の１～７は昨年度実施分であり、８～24が今年度実施の確認調査である。

第１表　確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積（㎡）	遺構の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	桜塚古墳群	南桜塚３丁目114	20020124	個人住宅建設	163.53	無	着工	陣内	
2	本町遺跡	本町４丁目61-1	20020131	個人住宅建設	67.41	未確認	着工	陣内	
3	岡町北遺跡	岡町北１丁目42-1	20020214	個人住宅建設	68.85	未確認	着工	陣内	
4	内田遺跡	柴原町３丁目148-1	20020307	個人住宅建設	110.04	無	着工	清水	
5	北条遺跡	小曽根２丁目1822-4	20020307	個人住宅建設	43.07	無	着工	清水	
6	新免遺跡	末広町１丁目60-6	20020307	個人住宅建設	131.53	無	着工	清水	
7	豊島北遺跡	曽根東町６丁目2-16	20020328	個人住宅建設	41.88	無	着工	陣内	
8	小曽根遺跡	北条町１丁目5-26	20020411	個人住宅建設	24.84	無	着工	橘田	
9	本町遺跡	本町９丁目54-7	20020523	個人住宅建設	61.54	未確認	着工	清水	
10	新免遺跡	玉井町２丁目206-3	20020523	個人住宅建設	55.48	可能性有	着工	清水	
11	上津島遺跡	上津島２丁目123-6	20020613	個人住宅建設	48.34	未確認	着工	清水	
12	上津島遺跡	上津島２丁目130-45	20020620	個人住宅建設	64.59	無	着工	服部	
13	桜塚古墳群	南桜塚２丁目73-2	20020627	個人住宅建設	65.93	無	着工	橘田	
14	新免遺跡	玉井町２丁目206-2	20020711	個人住宅建設	57.96	可能性有	着工	清水	
15	山ノ上遺跡	立花町２丁目25-1	20020718	個人住宅建設	81.00	無	着工	清水	
16	穂積遺跡	服部豊町１丁目198-13	20020815	医院併用住宅建設	131.99	未確認	着工	陣内	
17	野畑春日町遺跡	春日町４丁目9-4,5、11-2	20020905	個人住宅建設	60.52	無	着工	陣内	
18	新免遺跡	玉井町２丁目206-1	20020913	個人住宅建設	66.22	有	再立会後、着工	陣内	
19	北刀根山遺跡	刀根山元町225-4	20020926	個人住宅建設	63.55	無	着工	陣内	
20	桜塚古墳群	南桜塚１丁目38-5	20021010	個人住宅建設	63.22	無	着工	清水	
21	桜塚古墳群	南桜塚３丁目15-1,2	20021024	個人住宅建設	177.19	無	着工	陣内	
22	桜井谷窯跡群	上野坂２丁目848-12	20021031	個人住宅建設	86.95	無	着工	清水	
23	小曽根遺跡	北条町１丁目18-70	20021128	個人住宅建設	49.00	未確認	着工	陣内	
24	小曽根遺跡	北条町１丁目31-11	20021212	個人住宅建設	37.33	未確認	慎重工事	陣内	



第39図　確認調査地点位置図（1：50,000）

2002－01　桜塚古墳群

調査日：平成14年（2002年）１月24日

調査場所：豊中市南桜塚３丁目114

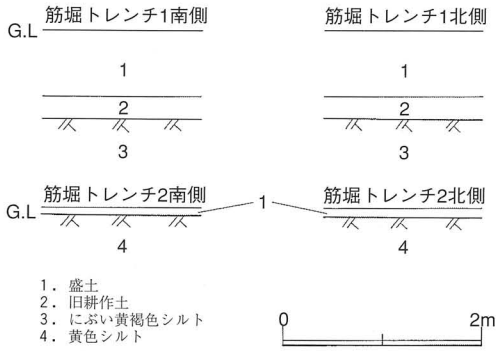
調査対象面積：163.53㎡

調査の方法：重機により筋掘トレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40～90㎝で基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第40図　トレンチ掘削状況



第41図　トレンチ断面図

2002－02　本町遺跡

調査日：平成14年（2002年）１月31日

調査場所：豊中市本町４丁目61-1

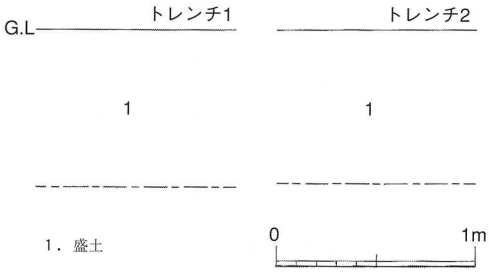
調査対象面積：67.41㎡

調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２ともに、基礎掘削は盛土内に収まることが確認された。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第42図　トレンチ掘削状況



第43図　トレンチ断面図

2002－03　岡町北遺跡

調査日：平成14年（2002年）２月14日

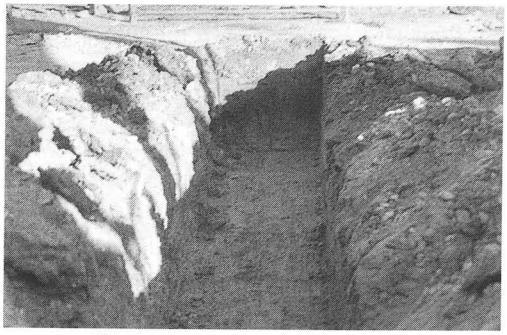
調査場所：豊中市岡町北１丁目42-1

調査対象面積：68.85㎡

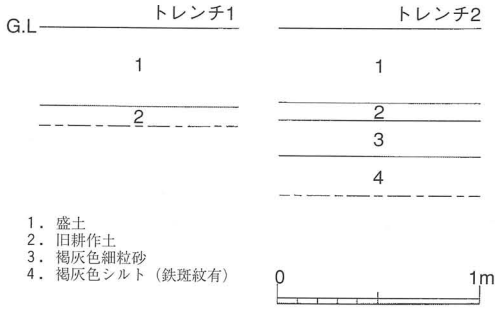
調査の方法：重機により筋掘トレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２ともに、基礎掘削は盛土内に収まることが確認された。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第44図　トレンチ掘削状況



第45図　トレンチ断面図

2002－04　内田遺跡

調査日：平成14年（2002年）３月７日

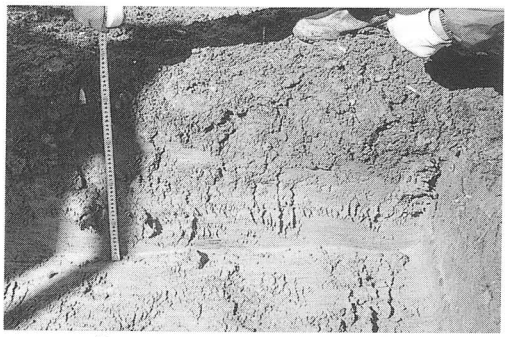
調査場所：豊中市柴原町３丁目148-1

調査対象面積：110.04㎡

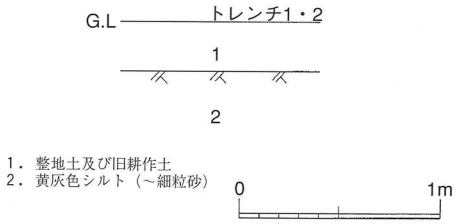
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２ともに、地表下25㎝で基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第46図　トレンチ掘削状況



第47図　トレンチ断面図

2002－05　北条遺跡

調査日：平成14年（2002年）３月７日

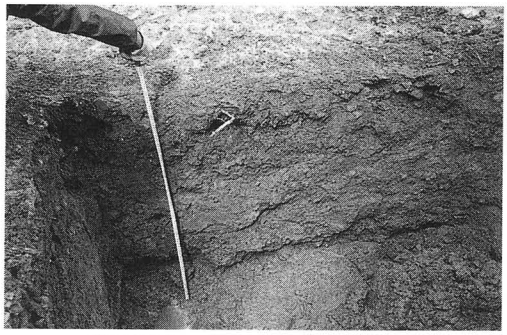
調査場所：豊中市小曽根２丁目1822-4

調査対象面積：43.07㎡

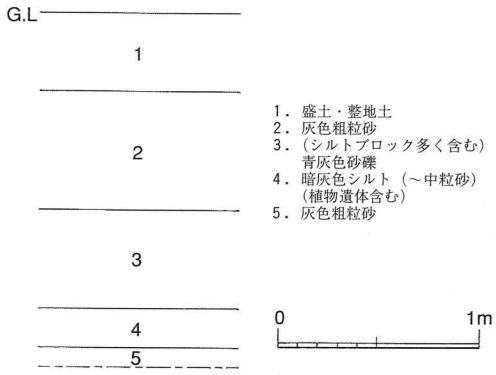
調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下180cmまで掘削した結果、当該申請地下が高川の旧氾濫源にあたることを確認し、掘削深度内において遺構・遺物ともに検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第48図　トレンチ掘削状況



第49図　トレンチ断面図

2002－06　新免遺跡

調査日：平成14年（2002年）３月７日

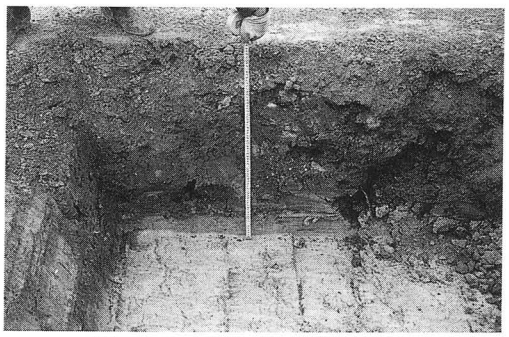
調査場所：豊中市末広町１丁目60-6

調査対象面積：131.53㎡

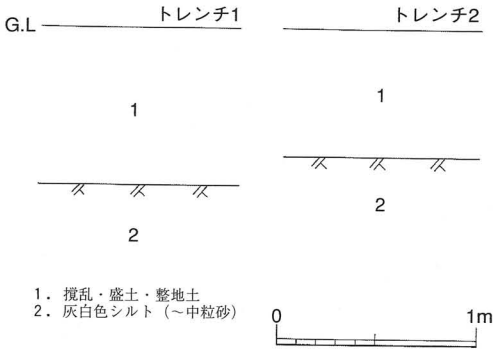
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２でそれぞれ地表下80cm・65cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第50図　トレンチ掘削状況



第51図　トレンチ断面図

2002－07　豊島北遺跡

調査日：平成14年（2002年）3月28日

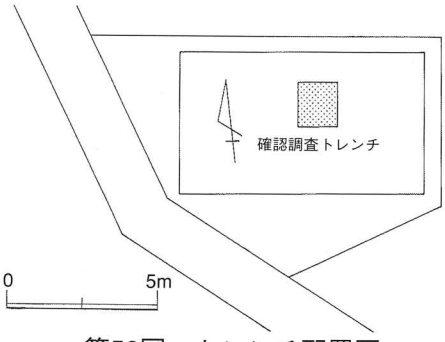
調査場所：豊中市曽根東町6丁目2-16

調査対象面積：41.88㎡

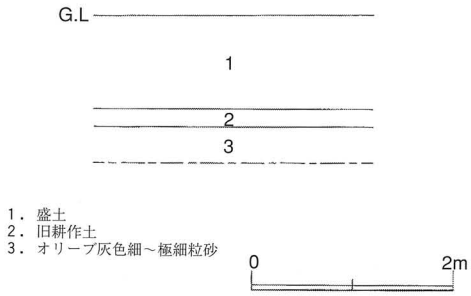
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下115㎝でオリーブ灰色細～極細粒砂層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第52図　トレンチ配置図



第53図　トレンチ断面図

2002－08　小曽根遺跡

調査日：平成14年（2002年）4月11日

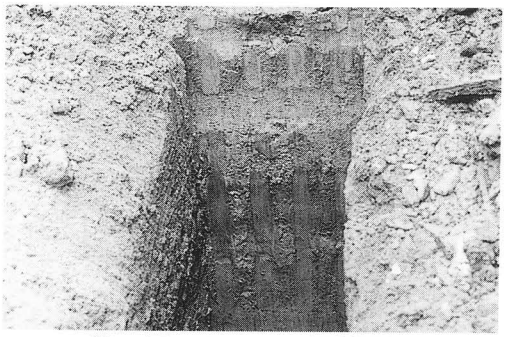
調査場所：豊中市北条町1丁目5-26

調査対象面積：24.84㎡

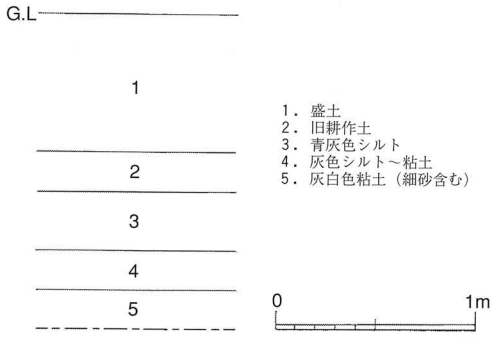
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削しトレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下160㎝）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第54図　トレンチ掘削状況



第55図　トレンチ断面図

2002－09　本町遺跡

調査日：平成14年（2002年）5月23日

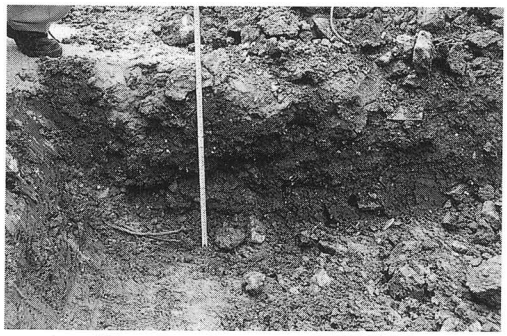
調査場所：豊中市本町9丁目54-7

調査対象面積：61.54㎡

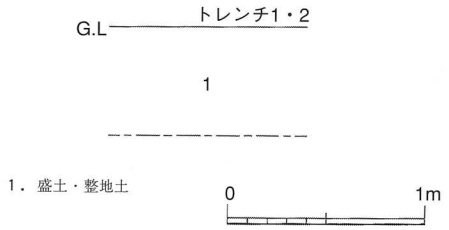
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：基礎掘削は盛土内に収まることを確認した。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第56図　トレンチ掘削状況



第57図　トレンチ断面図

2002－10　新免遺跡

調査日：平成14年（2002年）5月23日

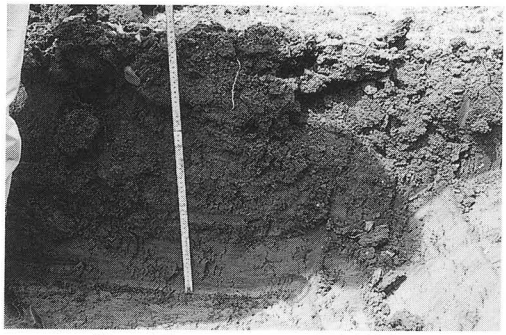
調査場所：豊中市玉井町2丁目206-3

調査対象面積：55.48㎡

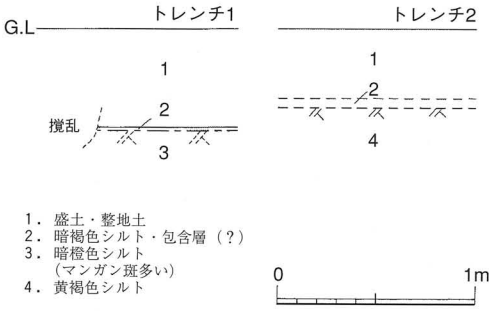
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下35～50㎝において、包含層の部分的な残存と基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第58図　トレンチ掘削状況



第59図　トレンチ断面図

2002－11　上津島遺跡

調査日：平成14年（2002年）6月13日

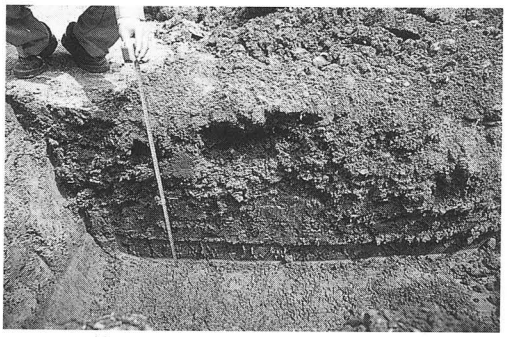
調査場所：豊中市上津島2丁目123-6

調査対象面積：48.34㎡

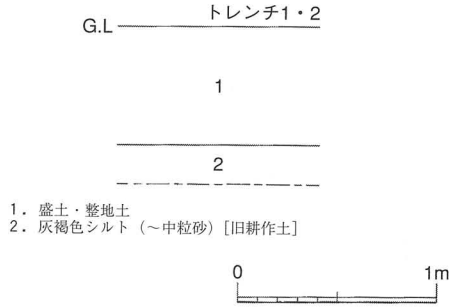
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：基礎掘削は盛土および旧耕作土内に収まることを確認した。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第60図　トレンチ掘削状況



第61図　トレンチ断面図

2002－12　上津島遺跡

調査日：平成14年（2002年）6月20日

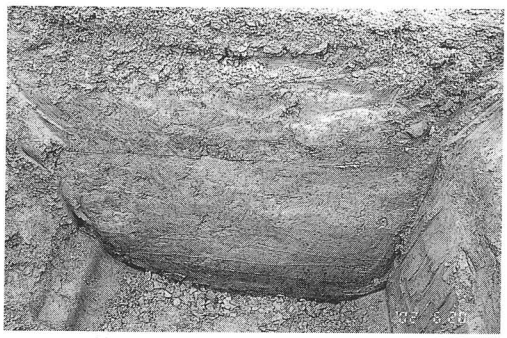
調査場所：豊中市上津島2丁目130-45

調査対象面積：64.59㎡

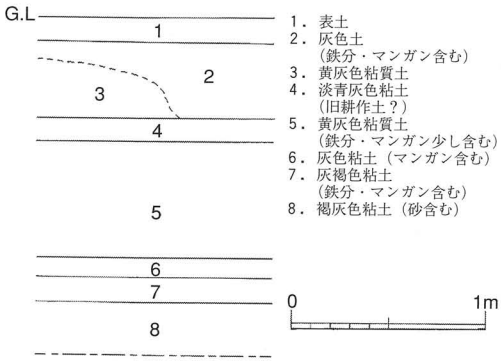
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下160㎝まで掘削し、地表下124～147㎝の灰色粘土～灰褐色粘土層において瓦器・土師器片等の遺物を確認したが、遺構は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第62図　トレンチ掘削状況



第63図　トレンチ断面図

2002－13　桜塚古墳群

調査日：平成14年（2002年）6月27日

調査場所：豊中市南桜塚2丁目73-2

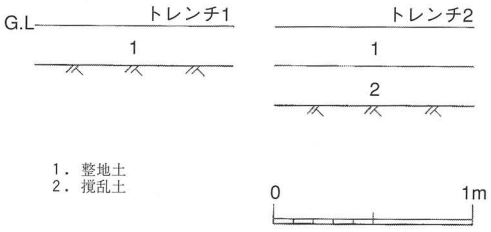
調査対象面積：65.93㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2でそれぞれ地表下20㎝・40㎝において基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第64図　トレンチ掘削状況



第65図　トレンチ断面図

2002－14　新免遺跡

調査日：平成14年（2002年）7月11日

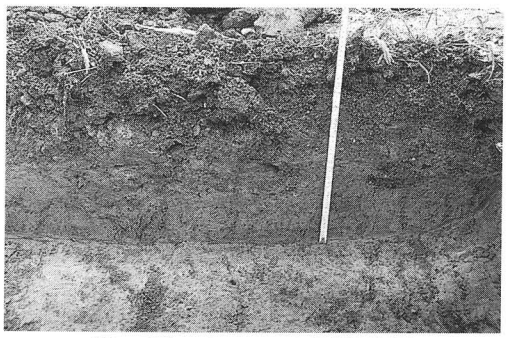
調査場所：豊中市玉井町2丁目206-2

調査対象面積：57.96㎡

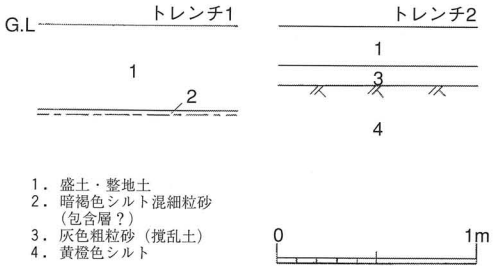
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では基礎掘削が遺物包含層より上位にとどまることを確認した。トレンチ2では地表下30㎝で基盤層を検出したが遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第66図　トレンチ掘削状況



第67図　トレンチ断面図

2002－15　山ノ上遺跡

調査日：平成14年（2002年）7月18日

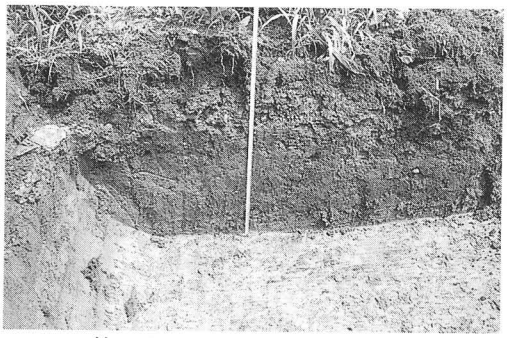
調査場所：豊中市立花町2丁目25-1

調査対象面積：81.00㎡

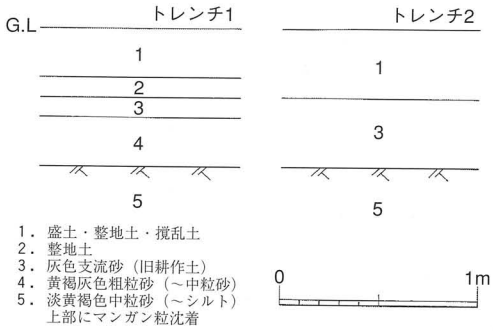
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下70cmで基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第68図　トレンチ掘削状況



第69図　トレンチ断面図

2002－16　穂積遺跡

調査日：平成14年（2002年）8月15日

調査場所：豊中市服部豊町1丁目198-13

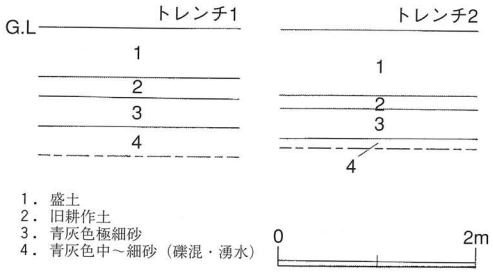
調査対象面積：131.99㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下130cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第70図　トレンチ掘削状況



第71図　トレンチ断面図

2002－17　野畑春日町遺跡

調査日：平成14年（2002年）９月５日

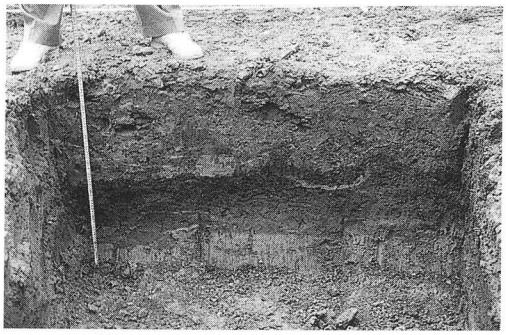
調査場所：豊中市春日町４丁目9-4,5、11-2

調査対象面積：60.52㎡

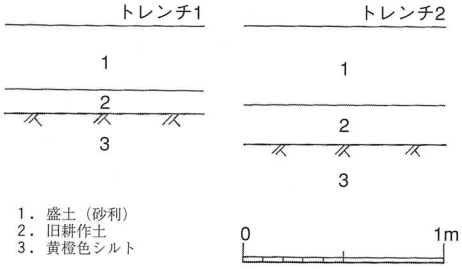
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ１・２でそれぞれ地表下45㎝・60㎝において基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第72図　トレンチ掘削状況



第73図　トレンチ断面図

2002－18　新免遺跡

調査日：平成14年（2002年）９月13日

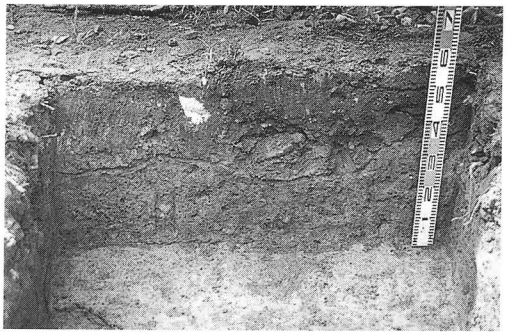
調査場所：豊中市玉井町２丁目206-1

調査対象面積：66.22㎡

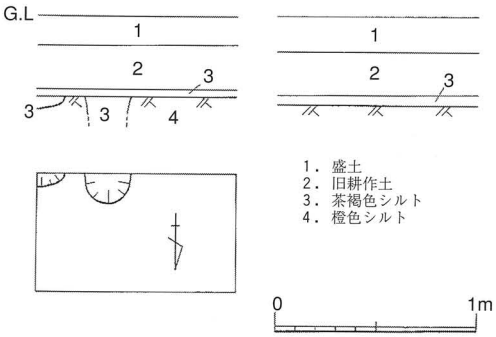
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下37～40㎝で遺物包含層を、同41～45㎝で基盤層を検出し、トレンチ１の基盤層上面においてピットを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土・旧耕作土内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第74図　トレンチ掘削状況



第75図　トレンチ平面・断面図

2002－19　北刀根山遺跡

調査日：平成14年（2002年）9月26日

調査場所：豊中市刀根山元町225-4

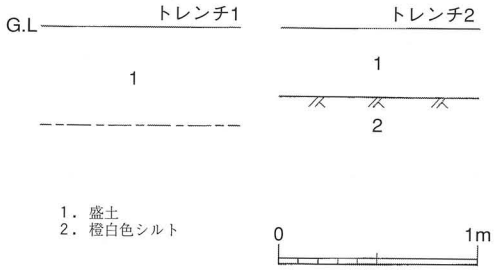
調査対象面積：63.55㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2で地表下35㎝において基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第76図　トレンチ掘削状況



第77図　トレンチ断面図

2002－20　桜塚古墳群

調査日：平成14年（2002年）10月10日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目38-5

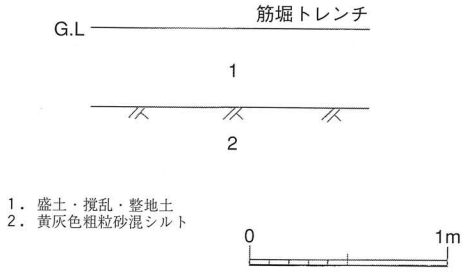
調査対象面積：63.22㎡

調査の方法：重機において筋掘トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40㎝において基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第78図　トレンチ掘削状況



第79図　トレンチ断面図

2002－21　桜塚古墳群

調査日：平成14年（2002年）10月24日

調査場所：豊中市南桜塚１丁目15-1,2

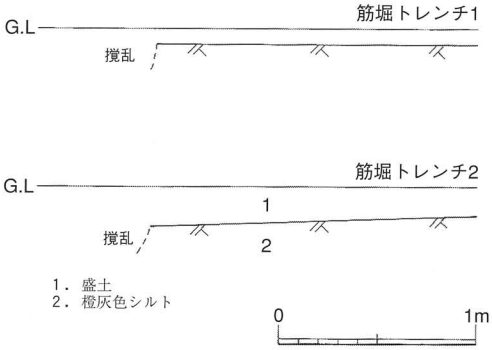
調査対象面積：177.19㎡

調査の方法：重機において筋掘トレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下８～20㎝で基盤層を検出したが、古墳に伴う遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第80図　トレンチ掘削状況



第81図　トレンチ断面図

2002－22　桜井谷窯跡群

調査日：平成14年（2002年）10月31日

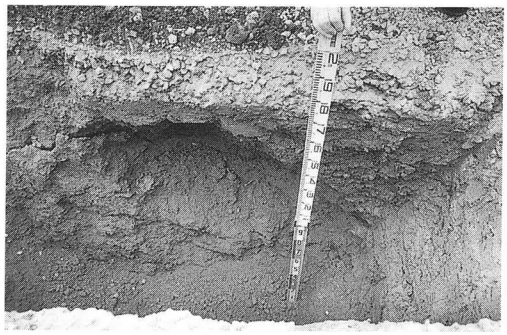
調査場所：豊中市上野坂２丁目848-12

調査対象面積：86.95㎡

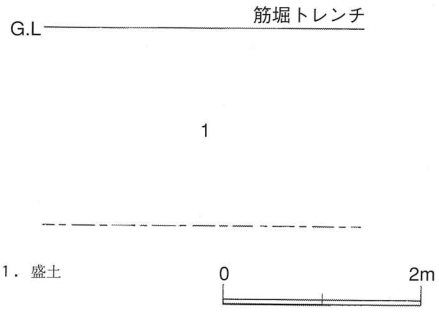
調査の方法：重機により筋掘トレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下200㎝）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第82図　トレンチ掘削状況



第83図　トレンチ断面図

2002－23　小曽根遺跡

調査日：平成14年（2002年）11月28日

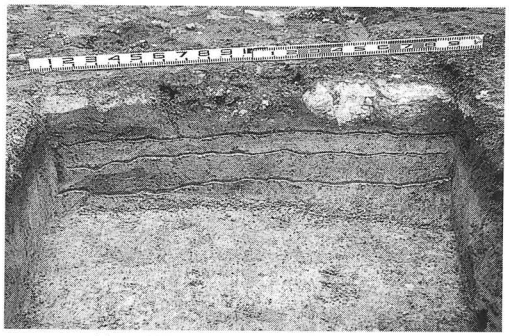
調査場所：豊中市北条町１丁目18-70

調査対象面積：49.00㎡

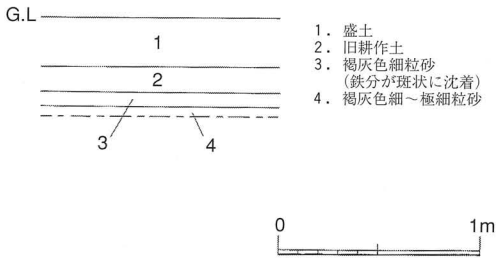
調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：基礎掘削は盛土、および旧耕作土内に収まることを確認した。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第84図　トレンチ掘削状況



第85図　トレンチ断面図

2002－24　小曽根遺跡

調査日：平成14年（2002年）12月12日

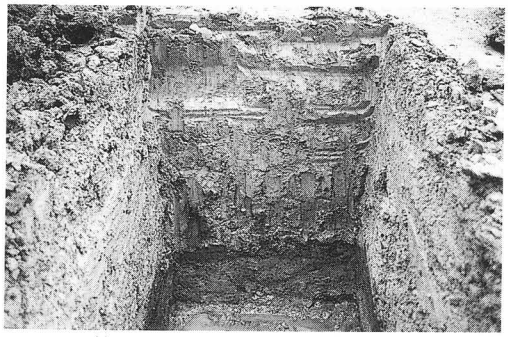
調査場所：豊中市北条町１丁目31-11

調査対象面積：37.33㎡

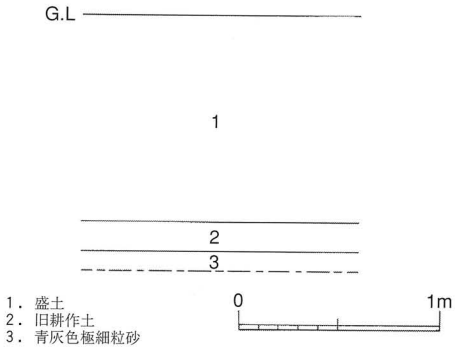
調査の方法：重機によりトレンチ１か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下120㎝で青灰色極細粒砂層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第86図　トレンチ掘削状況



第87図　トレンチ断面図

図　　版

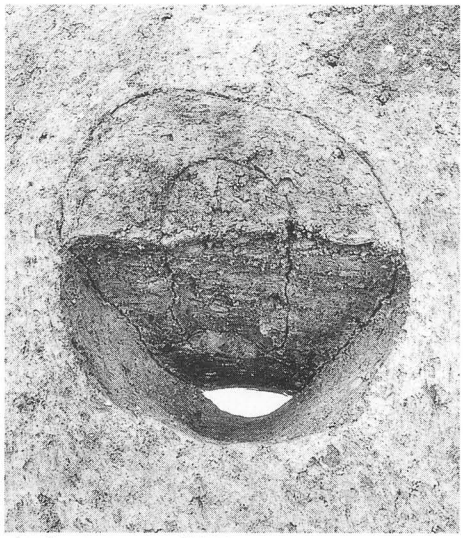
図版1　麻田藩陣屋跡第11次調査

（1）調査区全景（北東から）

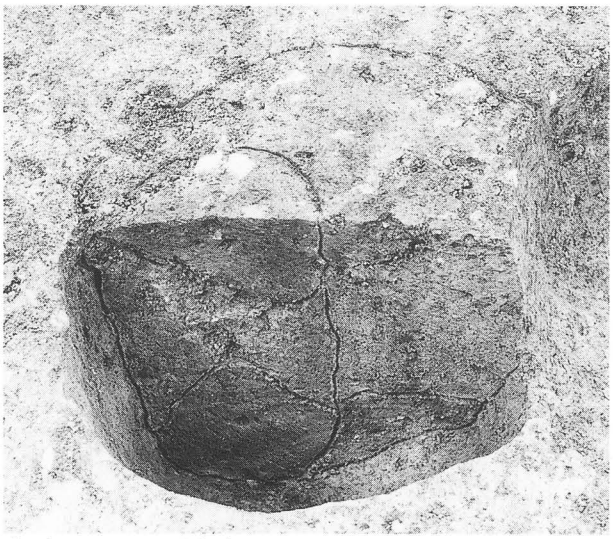
（2）礫出土状況（西から）

図版2　麻田藩陣屋跡第11次調査

（1）調査区西壁断面（南半部）

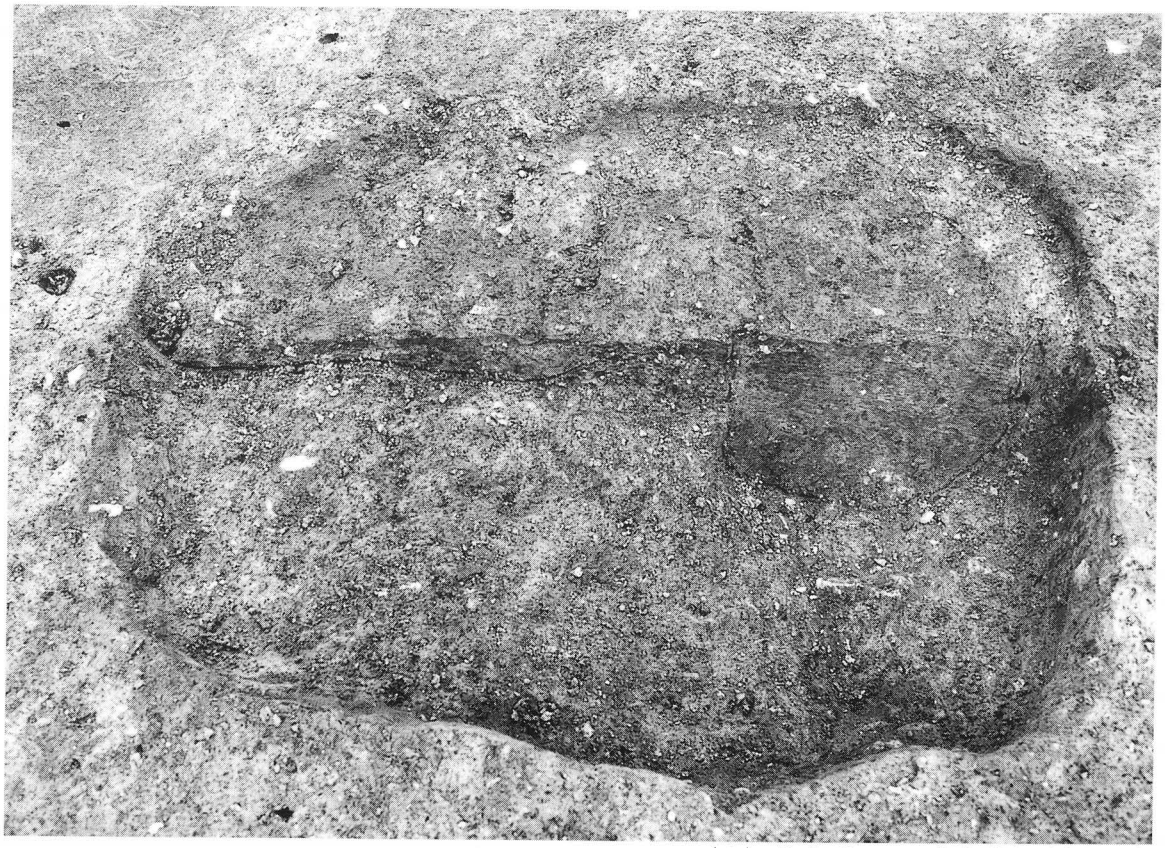


（2）ＳＰ－１断面



（3）ＳＰ－30断面

（1）調査区全景（北から）



（2）柱穴列2－c掘削状況（南から）

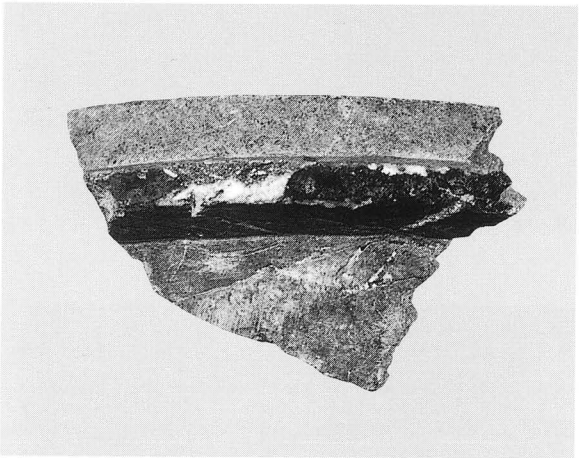
図版4　本町遺跡第27次調査

（1）竪穴住居完掘状況（北東から）

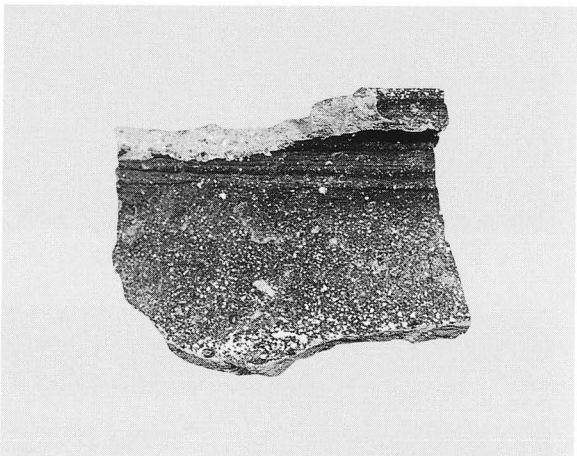
（2）造り付けカマド検出状況（南から）

図版5　本町遺跡第27次調査　出土遺物

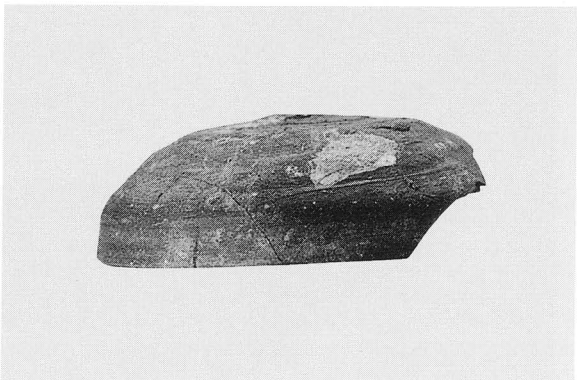
（1）竪穴住居（第11図）



（2）井戸（第13図4）



（3）井戸（第13図5）



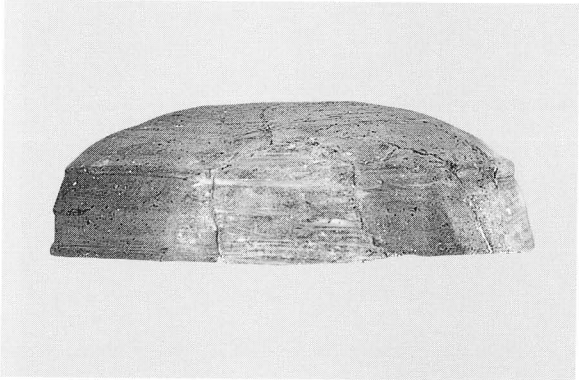
（4）ピット1（第13図6）

図版6　新免遺跡第53次調査

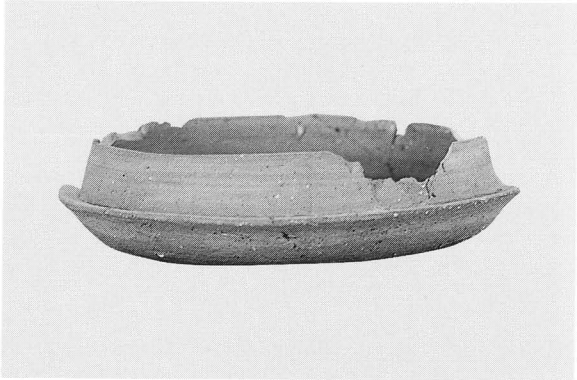
（1）調査区全景（南東から）

（2）溝1遺物出土状況（北から）

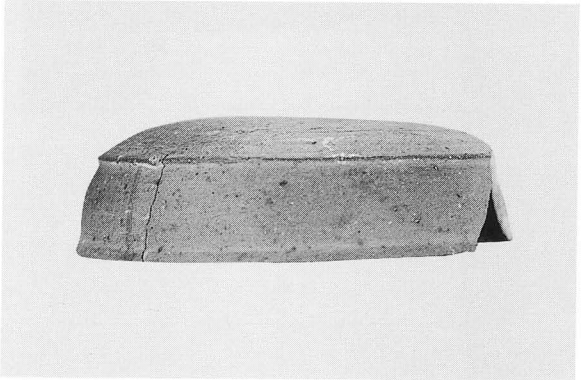
（1）土坑1遺物出土状況（南から）



（2）溝1（第19図1）



（3）溝1（第19図4）



（4）土坑1（第19図5）

（5）土坑1（第19図8）

図版8　新免遺跡第54次調査

（1）調査区全景

（2）木棺墓1・土坑1近景

（1）木棺墓1（東から）

（2）木棺墓1（南から）

図版10

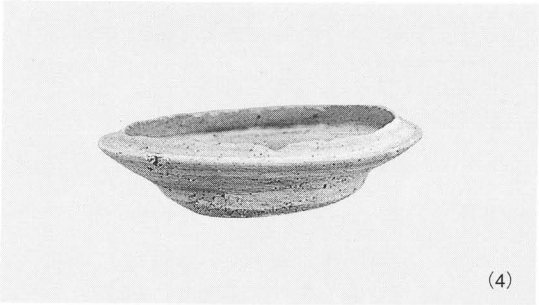
新免遺跡第54次調査

（1）木棺墓1遺物出土状況

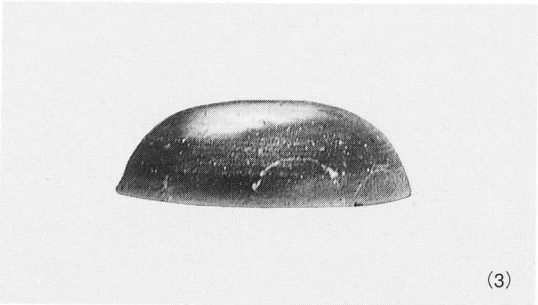
（2）土坑1

（1）溝1

(2)



(4)



(3)

出土遺物

（2）第24図1

（3）第24図2

（4）第24図3